



東方三界黃龍傳

shanghai1996 上海1996

小龍

東方三界黃龍伝

『上海1966』

小龍

目次

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
good bye Shanghai	賭け	配牌	老師を探して	道士	北京の劉	沙龍の秘密	who is the enemy?	狗	我が街、上海	ブルー・ドラゴン	
193	180	158	140	125	103	88	68	49	19	4	

1 ブルー・ドラゴン

ドアを開けた途端、鮮やかなブルーのチャイナドレスが視界に入った。

(またか……)

舌打ちしそうになったのを、なんとかこらえる。

『ラオベン老板』の前でそんな無礼をやらかしたら、部屋の片隅に控える彫像のようなボデイガードたちに、顔の形が変わるほど殴られた上、確実に東南アジアの支部にでも飛ばされるだろう。それは遠慮したい。上海から出る気はない。ここには、ワン汪の望む全てがあるのだ。退屈を紛らわせることのできる、ありとあらゆるものが――。

バンコクやヤンゴンで高い給料を貰っても、そのカネを使う場所がないではないか。暑いだけの田舎でくすぶるのは真っ平ご免である。

数年前、ハノイに駐在していた時は、仕事以外やることがなく（さらに言うなら、その仕事として毎日する必要もなく）、ただただ、怠惰で退屈な日々だった。

自分にはつくづく田舎暮らしはできないのだと、と汪は思う。

その点、上海ほどの都会なら色んな人間が居て、夜を凌しのげるだけの有象無象がある。香港でもいいが、あそこはいい思い出がない。

(全く、老板も物好きなの……)

舌打ちは我慢したが、サングラスの下で眉間には思いっきり皺を寄せていた。

だから、いざ、大きなテーブル越しに老板の前に立った時は、その眉間の皺を充分伸ばしてからサングラスを外した。といっても、この薄暗い部屋で、老板の老いた目に、汪の眉間が見えているかどうかは怪しい。昼でも厚いビロードのカーテンを閉め切った部屋は『蒼龍会』の伝統みたいなものだが、ただ単に、この飴色の立派な椅子に座るような人物は陽の光が苦手ということかもしれない。最初から嫌いだっただけか、長年の地下生活によって嫌いになるのかは、汪には分からない。

この頂点のような部屋で不快なブルーのチャイナドレスを見るのは三回目くらいだと思う。この少女は、いつまで、当然のようにそこに居る気なのか。

老板は既に八十歳を超えている。艶事方面は現役のはずがない。

だから、このローティーンにしか見えない少女が文字通り、蒼龍会の老板の愛人であるはずもなく、毎晩添い寝くらいはしているのかもしれないが、それならそれで、もっと選びようがあるだろう、と汪は思うのだ。青いチャイナドレスの中身は、決して美人でも、可憐でもない。棒に手足がひつついたような少女なのである。

汪はこの少女が嫌いだった。前に、老板に決算報告をしに来た時、自分を一瞥した視線が気に入らなかつたからだ。

その不遜な目つきは、明らかに普通の少女のものではない。

しかし、一体、何様だというのだ。おおかた、路地裏をうろついていた浮浪児だろうに。気まぐれな金持ちに拾われ、綺麗な服を着せてもらって、何か勘違いしているのではないか——？

少女は、大抵、老板の横にピタリと寄り添うように立っていて、汪や、他の幹部たちが、老板に色々な報告をしているのを興味なさそうに聞いていた。いや、実のところ、まるで聞いてもない様子だった。今日も少女は老板の座る椅子の肘掛の部分に軽く腰掛けて、つまらなさそうに雑誌をめくっている。

汪が一通りの報告を終えると、いつものように、やや間をおいて、老板が聞いた。

「香港はどう言っている？」

「おおむね、恭順の姿勢ですが」

「いや、そうではないよ。香港はお前を欲しがっているそうではないか」

「それは張大哥の戯言ですよ。自分はここを離れる気はありません」

「上海の水が合ったか。それとも、香港に帰りたくない事情があるのか。まあ、

どうでもよいわ。残る以上、外灘ワイタンの件は早急に片付けておくようにな」

「御意……」

何故、こんな毒にも薬にもならない老人が、この飴色の椅子に座っているのだろう、と不思議に思うことがある。無能なわけではない。組織のトップに立つべきものは全て揃ってはいると思う。すなわち、判断力、洞察力、知識、経験――。

しかし、普通の会社はそれでよくとも、『蒼龍会』は普通の組織ではない。仮にも、中国全土をカバーしうる力を持つマフィアである。その組織に君臨する男

が、こんな干からびた老人でいいのだろうか。

薄くなった白髪や、温和な表情は、世俗を捨てた仙人を彷彿させる。とても、若い頃に鉄火場をくぐってきた人物には見えない。

もしかして、中年に片足を突っ込んだだけでは見抜けないような何かがこの老人にはあるのかもしれない。最近は、そう思うようにしている。なにせ、向こうは自分の倍以上の年月を生きている、妖怪のような生き物である。そうだ。この悪徳の世界で八十年生きているといことが既に稀有なのだ。

ブルーのチャイナドレスは、老板と汪の話を全く聞いておらず、大きなあくびをしていた。

その時、

シヤオチエ

「小姐——」

広いテーブルの端で書類を広げ、書記係のように静かにペンを走らせていた男が顔をあげ、声をかけた。まるで、少女のあくびをたしなめるように。

書記係は、汪より少し年上のはずだが、血色が悪く、全体的に老けて見える。

細い身体と、細い目が特徴の男だった。

名前を董天^{とうてん}という。蒼龍会の古株だ。汪もこの男のことはよく知っている。五年ほど同じ現場で働いたことがあった。

「……なに？」

不機嫌そうに答えた少女は、董天をうるさそうに見た。

汪は、この時、初めて少女が喋ったのを聞いて、なにか、どこかに違和感を覚えた。それが何であるのかは、まだ説明できない。

「退屈なら、無理に同席しなくともよいのですよ」

優しげに聞こえなくもないが、董天は遠まわしに『出ていけ』と言っているのだ。

少女は、一瞬だけ眉をひそめたが、願ったりかなったりだと言わんばかりに、広いテーブルを回って、汪の脇を通り、部屋を出て行こうとした。

その時、汪は唐突に気付いたのだ。

老板が今までなんの決定もしていない、ということに。

今までに、何度かこうして老板と直接、話をする機会があった。そのこと自体、蒼龍会のメンバーとしては誉れであったし、この部屋に出入りできるという

ことは出世を約束されているようなものだった。中国全土に影響力を持つ蒼龍会ともなれば、一つの王国である。末端のメンバーなど、自分たちのトップの顔も知らなければ、名前も知らないはずである。

その雲の上の人物でもある『老板』が、今までに汪と直接言葉を交わした中で、次はああしろこうしろ、という指示をしたことは、今までに一度もなかった。

重大な決定は、あとでメールや側近によって汪に伝えられていたのだ。

これは、一体、どういうことだ——？

そこで、一瞬、思考が停止し、汪は本能的に懐の銃把に触れた。誰を撃とうと
いうのではなく、危険を察知した時の、動物的な反応だろう。

しかし、汪の右手は、銃把に届かなかった。阻止されたのだ。

「……!?!」

小枝のような少女の手が、汪の手首をつかんでいる。

ズツとするほど冷たく、強い力で、そこはコンクリートで固められてしまったように一ミリも動かなかった。

「この部屋で、それは抜かない方がいい。ミスター」

さっきの無愛想な声音と打って変わって、少女は愛想よく、にっこり笑って言った。

その笑顔が、ひどく禍々しいものに見えた汪は正しい。

「な……っ？」

言葉にならず、少女の据わった瞳を間近で凝視する。

不思議な色をしていた。これは緑青りよくしやう といえいいのか。

長い髪も、東洋人にはありえないほどの薄い茶色のような色で、全体的にちぐはぐしたイメージが拭えない。中途半端に二つにまとめているせいで、後れ毛がほうぼうに飛び跳ねていた。

いったい、彼女は“なにもの”なのだろう——と、思った。

愚問だ。

上海語訛りの中国語を喋っている以上、普通の中国人のはずである。

「安心しろ。お前の目の前に居るのは妖怪じゃない。私の握力が強いには理由がある」

妖怪でないのなら悪魔か。

この握力も、緑色の瞳の異様な輝きも、人のものとは思えない。

「沙龍様シヤロン、いいんですか？」

口を結んだ老板が変わって、董天がそう聞いた。その響きはどこか投げやりだ。

「いいも悪いも、この男が気付いちやっただから、しようがない」
いつからそうになっていたのか、汪は知らない。

数年前、トップがすげ変わった、という話は勿論知っている。

しかし、老人たちはいつも権力争いをしているし、誰がどこの派閥を潰した、などという話は蒼龍会では日常過ぎて、特に問題にならなかった。

まさか、長年君臨していた『黒猫』を蹴落とし、この飴色の椅子を我が物としたのが子供のような少女だったなどと、誰が信じるだろう。

「今時、実は決裁は社長の愛人がやってました、なんて珍しくもないだろう？」
少女が言う。

視線をさ迷わせ、老人と董天を見ると、二人とも同じ表情をしていた。苦笑す

るような、同情するような――。逆らわないほうがいいぞ、という警告の意味も見てとれた。

「……それで、秘密を知った私は殺されるんですか？」

汪は両手を広げて見せる。

そうならないだろうという自信があるからできる仕草だ。

「別に秘密でもなんでもないんだがな。このネタで強請られても十ドルくらいしか出せない」

李沙龍は、今度は素直な笑みを見せた。恐らくは歳相応の笑顔だ。

しかし、無罪放免というわけにもいかないのだろう。

小さな老板は、こんな提案をした。

「お前も『こちら』に来るか？ ヴイツキー」

「どうして、私の香港での名を？」

驚きと共に聞いたが、彼女は笑っているだけだった。

その英語名は、汪本人があまり気に入っておらず、香港に居た時も周囲にはほとんど使われていない。

ここ上海では、知る者など誰も居ないだろうと思っていたのに。

「自分の所属組織の情報網を舐めてちやしようがないな」

それが李沙龍の答えだった。

「別に難しいことをしろって言うんじゃない。こんな大所帯をまとめるには見せ掛けの威厳も必要だって話さ」

汪が逆らえるはずはない。

蒼龍会は、既に、李沙龍の王国だったのだ。

青いチャイナドレスに刺繍された龍が、最初からそう言っていた。

龍は、この大陸ではすなわち皇帝である。

厳密な意味での皇帝は清朝を最後に滅んだが、王者という意味では、この大陸に龍脈と龍穴りゅうけつがある限り、滅びはしない。

龍穴に巢食う黄龍こうりゅうは、保持者の魂を渡り歩きながら、永遠に存在し続けるのだ。この大陸の絶対者として。

「つまり？ 李沙龍は黄龍に選ばれし保持者なのか？」

汪はサングラスをしたまま、尋ねた。

これを外すのは寝る時と風呂に入る時と老板の前だけと決めている。

「そうですよ。あなたのことだから、とつくに気付いてるかと思っただんですが」
董天はそっけなく答えた。彼は誰に対してもこの口調である。部下に対しても同じ調子なので、中学も出ていない下っ端などは、董天のことを組織のお抱えの教師かなにかだと思っている。

彼はなるべく陽の光が当たらない部屋の隅で新聞を読んでいた。やはり、まぶしいのは好きではないらしい。だったら、汪のようにサングラスでもしていればいいのだが、似合わないという理由でこれも敬遠している。確かに、黒いスーツも、オートマチックの銃も似合わない男だ。こけた頬といい、表情の読めない細かい目といい、どこか不気味なイメージがある。

が、汪はこの男が嫌いではなかった。董天ほど仕事が確実に早い男は居ない。人付き合いは決していい方ではないが、無駄に敵を作らないところも非常に買っていた。見習いたい処世術である。

「いや、全く知らなかった。ただ……、数年前に、第三部隊がどっかの山奥からお宝を連れ帰った、って噂は聞いたことがある。それか？」

「その部隊の指揮をしたのは私です。『黒猫』の命でね」

「ほほう……」

あの老獺で欲深い先代が、富と権力に飽き足らず、神秘の力を欲しがったのは分かりすぎるほど分かる。

昔から、どこかの山村だか砂漠の集落だかに、神獣の力を代々操ることのできる一族が居る、という話は蒼龍会の内部にしつこくあったのだ。

しかし、そのような『伝説』は、中国全土に掃いて捨てるほどある。汪などは、はなから信じていなかった。

「で、どうやって『伝説』を見つけたんだ？」

「まあ、ラッキーが重なった結果ですかね」

そんなの嘘に決まってる。嘘でなければ、嫌味な謙遜だ。董天のやることに『運』が介入する余地などないはずだし、そもそも『運』を当てに仕事をするような人物ではない。

漢王朝の劉邦から始まって、代々の皇帝たちが探し続け、とうとう見つけることのできなかつた『黄龍』を、一見、役所の事務員みたいな男だけが見つけられたなど、胡散臭すぎて笑ってしまう。

「ご謙遜を……」

からかうように苦笑した。

「まあ、そういうことなので。あなたもボスの遊び相手になってやってください。私一人ではとても務まりませんのでね」

董天は汪の聞きたいことには気付かない振りをして言った。

「遊び相手って……、あのティーンエイジャーと何をしろって？ 娘みたいな歳だぜ？ 遊園地にでも連れて行けってか？」

「小姐が望めば、そうしてください」

「おいおい、冗談だろ」

ただでさえ半信半疑なのに、そんな大役を押し付けられてはたまらない。が、董天は冗談を言っているわけではないのだ。

新聞の向こうから細い目を覗かせて、曇み掛ける。

「『黒猫』が失脚した二年前から今まで、組織内でなにか滞ったり、関連会社の株が下がったり、なにか不都合なことでも起きました？」

「いや……、それはないというか、むしろ、仕事がやりやすくなった部分はあ
る」

「なら、問題ないじゃないですか。我々の大切な『小姐』をよろしくお願いしま
すよ」

「お守り役はあんた一人が居れば充分だろう？」

「私は嫌われてますのでね」

シラツと言いつ切る董天は、それを意にも介していない。『小姐』に好かれない
とは思っていないのだ。

その日から、汪の受難が始まった。

2 我が街、上海

その頃の李沙龍は明らかに色々な感覚が麻痺していた。

始末が悪いのは、本人がそれを自覚しているところだった。それは開き直りの一種だったのかもしれない。

高校生までは普通の（どちらかといえばエリート階級の）教育を受けて育った汪には、その傍若無人ぶりが理解できない。

本人曰く、破茶目茶なのは失恋した反動でやさぐれたせいというが、よくよく聞いてみたらその『失恋相手』もロクな男ではなく、さらに、それは彼女が十歳の時らしい。

それを、汪は、さつき、情事の後にベッドの上で聞いた。

「いくらなんでも早熟すぎやしねえか？」

鼻唄まじりでバスタブに浸かっている沙龍は、完全に身体を伸ばしてリラックスしている。シャワーカーテンは閉めていないし、泡風呂というわけでもないの

で、裸が丸見えだ。

これが成熟した女性ならば、もう一戦交えようという気にもなるのだろうが、どう鼻屑目に見ても『それ』は『女』の身体ではなかった。小枝のような手足が嫌でも目につく。

それを見たくないなので、汪は髭を剃ることにした。もともと、そのつもりでバスルームに来たのだ。

「ん？ 鉄さんの話？」

「そうだ。博打打ちのロクでもない男に惚れるなどは言わないが、そういうのはあと二十年くらい人生経験積んで、周りにイイ男が居なくなってからにしろ」

「フン……」

お説教ならお断り、と言わんばかりに口をゆがめる。

が、それくらいで怒りはしないはずだった。この二週間で、李沙龍がいわゆる『我がままお嬢』ではないことは学んだつもりだ。

董天からも「特に進んで機嫌を取る必要はないです」と最初に言われていたので、素のまま相手をしている。

ただし「著しく機嫌を損ねると殺されますよ」とは言われた。そのバランスを見極めるのはわりと難しい。

「極道に比べれば、まだ鉄さんのほうがマトモだったと思うけど？」

「雀士もマファイアもたいして変わらないだろう。俺の言うこつちやないが」

「フン……」

沙龍は口を尖らせながらも、バスタブのへりにあごを乗せ、髭剃りをしている汪をじっと見つめた。

それは、珍獣でも見ているかのような目つきだ。

汪が、怪訝そうに「なんだ？」という表情を向けても、沙龍は視線をそらすことはなかった。

「……」

これは、へりくだる必要のない者の眼差しだ。

王者である李沙龍には、自らが道を譲る必要は一切ないのである。

沙龍は、サングラスを外した汪の顔をまじまじと見つめるのが癖になっているようだった。幸いにも、まだ飽きてはいない、ということだろう。

(こんな顔が珍しいなら、好きなだけ見るがいいさ)

我ながら、どこと行って特徴のない、どこにでもよくある顔だ。

やや垂れた目が、優男に見えなくもない。

それが嫌で、許されるような地位になってからは常にサングラスをするようになったのだ。

諦めて、視線を鏡の中の自分に戻した汪は、沙龍のことは忘れ、次の予定に思いを馳せた。少し厄介な仕事である。恐らく、撃ち合いになるだろう。

ここ半年ほど、外灘を荒らしまわっている若いギヤングが居るのだ。

勝手に賭場を開いて、驚くほど短期で撤収する、というのが奴等のやり方だった。

その賭場も、一流ホテルの会議室だったり、寂れた裏通りの煙草屋の地下だったり、と様々で、的が絞れない。

老板にも早く片をつけろと言われているのだが、これが意外にも難航している。

どうやら、敵のリーダーは若いながら切れ者らしい。今までのところ、こちら

にも死人が一人出ている。そのせいか、汪は少し焦っていた。

「ヴィツキー」

ずっと汪を見つめていた沙龍がやっと口を開いた。

「……？」

「外灘、一緒に行つてあげようか？」

にっこり笑つて言う。

どうやら、汪の今夜の予定を知っているらしい。

といつても、目端の利く沙龍のことだから、誰かから聞き出したわけではないだろう。そもそも、汪は今夜の予定を誰にも言っていない。

汪が髭を剃っているのは、今から会う相手が意中の人だから、ではない。気合を入れるためにしているのだ。それは、普段の汪の生態を見れば分かる。

そして、今は午後六時をまわったところだ。この時間から行くということは普通の仕事ではない。「ちよつと特別な仕事」だ。

恐らく、その二点のみで「行き先は外灘、つまり、目下の敵陣」と判断したこの小さな老板にはいつも舌を巻く。

「やめてくれ。あんたが出張ると俺の仕事が増える」

「フーン……？」

「大体、十五のガキが蒼龍会のトップだと公言するのは得策じゃないと言ったのはあんただろう」

「わざわざ公言するつもりはないよ。死相が出てるから、守ってあげようかって言ってるだけ」

「そういうのは尚更やめてくれ。あんたにササクレ一つ作っただけでも俺は董天^{ダーレン}大人に殺されるんだ」

「フーン……？　じゃあ、董天がいいって言ったら連れてってくれるんだ？」

「……？」

沙龍は風呂から出ると何かが切り替わったようにテキパキと動いた。バスローブを羽織り、タオルで頭をごしごしと拭きながら、部屋中をうろろ歩いて携帯電話を探し、ソファの上に見つけるやいなや、どこかに掛けはじめた。

汪はそれを呆然と眺めていた。

さきほど言われた言葉がじわじわとよみがえる。

（“死相”だって？ 冗談じゃない）

生まれてこの方、そんなインチキ占いみたいなお告げを信じたことはないし、そもそも、沙龍自身、そんなものはまるで信じていないはずだ。

沙龍は通話相手に早口でまくし立ててから携帯電話を汪に放り投げ、自分は早速着替え始めていた。

『もしもし？』

携帯電話の向こうは予想通り、董天だった。

『なんでも、ミスター汪が自分を信用していないようなので、説得してくれ——って話のようですが、どこかに出かけられるんです？』

「ああ。外灘へ」

それだけで董天には充分だと思ったが、少しは説明をした。

「連れていくのを渋ったら、このざまさ」

『なるほど。そういうことですか。でも、私が止めても許可しても、沙龍様はもう行く気みたいですし、そうなったら、あなたの仕事は沙龍様を守ることじゃないやなくて、被害をいかに抑えて、マスコミを遠ざけるか、ってことになりますよ。』

あ、できれば街の景観は壊さないでください。外灘は歴史的な価値もありますし』

「〃景観を――、壊す〃？」

嫌な予感で繰り返したが、それが冗談ではないと分かっている。

『黄龍の保持者』の凄まじさを知っている董天が大真面目に言っているのだから、李沙龍が怒れば、ビルの一つや二つ、簡単に倒壊するのだろう。

「……」

汪は、髭を剃るのも忘れて、妙な日本語の歌を唄つつ鮮やかな青いチャイナドレスを身に纏う沙龍を見ていた。

なぜ日本語だと分かるのかというと、ところどころに「トーキョー」という言葉が出てくるからだ。汪の知る日本語など、それくらいである。日本人の知り合いいも居ない。

「チョイトー、トーキョー、オンドゥ」

そういえば、彼女はいつも同じ歌を唄っている。

音痴ではないが、たいしてうまくもない。が、汪はこの歌声を聞くのは嫌いで

はなかった。

喋る時とは違う、少し高めの音程で、ささやくように唄うその様は、唯一、普通の女の子だと思える瞬間だからだ。

(日本語の歌は、例の雀士に習ったのか)

やっとなんか思い当たった。

無意識に鼻唄で諳んじるといふことは、それなりに根深いようだ。

初恋の人に果敢にプロポーズし、その場で玉砕したという話は、彼女の中ではまだ笑い話にはなっていない。

当然である。なにしろ、李沙龍はまだ十五歳だ。

「その格好は、目立つな」

既に着替え終わって靴を探していた沙龍に、汪は控えめに言った。

繁華街のサービス業でも、女優でもモデルでもないのに、今時、こんな格好で外を歩く酔狂な者は居ない。ホテルの廊下に出た途端に人目を引くだろう。

そして、この世界で目立つということとはあまりいいことではなかった。これから戦場に行こうというなら、なおさらである。

しかし、言ってから、汪はとんだ失態を犯したという事にも気付いた。

王者に対して「目立つ」などと注意でもするつもりだったのか？ 目立ってこそその王者だろうに。

李沙龍は、汪の苦言に気付いていたが、それでも怒るようなことはなかった。

「これさ、張がくれたんだよ。バリエーションはいくつかあるんだけど、全部、青龍なのね。オーダーメイドだから、きつと高かったと思うんだけど」

「張？ 香港の『張大哥』か？」

チャンタールコ

あの切れ長の目をした美丈夫を思い出した。

男にも女にも人気のあった張大哥は、今、香港に居る。

理想的な容姿と明晰な頭脳を持つあの曲者は、働き盛りの四十代を、隠居老人のような閑職の中で浪費しているという噂だ。

「知り合い？」

沙龍が不思議そうに聞く。

「まあ、狭い世界だし、向こうは有名人だ」

肩をすくめて見せる。が、汪は内心驚いていた。

『張大哥』は、先代『黒猫』の片腕だった男である。黒猫が自然死した時は（つまり殺されたりしなければ、という意味）次の総帥になるだろうといわれていた。

が、クーデターは起き、黒猫は（恐らく）殺され、張大哥は現在、第一線を退いた形で、香港支部の相談役になっている。それが、もしかしたらただの左遷ではないのかもしれない、と思ったのは、この時が初めてだった。

「お前さんは胸も尻も貧相だから、こんなもんでも着ていないと体裁が悪いとか、なんとか、そんなことを言ってたかな。で、まあ、一応、前ナンバー2の顔を立って着てあげているわけなのよ」

普通なら怒ってもいいことを、そんな軽い言い方をする。

それだけでも、二人の関係がただの上司と部下ではないことが分かった。

「フーン、あの張大哥がねえ……」

「あ、そうか。ヴィツキーを悪の道に引きずり込んだ張本人だったね。あ、もしかして、それで、あの人、ヴィツキーに香港に来て言ってるの？そんな義兄弟な関係？」

「さあ、どうだろうな」

思わず苦笑が漏れる。

あらたまつて義兄弟の杯を交わした記憶はないが、張はそのつもりだろう。

兄貴風を吹かせる男ではないが、「俺が拾ってやった」という意識は常にあるはずだ。

そう。

十五年前の一九八一年――。

まだ、張が『大哥』と呼ばれる前のことだ。あの悪名高き九龍城砦が、香港と
いう街の代名詞だった時代、汪は文字通り張に拾われたのである。

「しかし、追いやった男の顔を立ててやるっていうのは、どういう心境なんだ？
俺には理解できん」

「追いやったつもりはないんだけど。本人が故郷クニに帰りたいていうから、じゃあ、香港をお願いって言っただけで」

既に出かける準備を終えたらしい沙龍は、金色のごちやごちやした布地のソファにゆつたりと座って、煙草を吸っている。

汪のほうが髭を剃りあげたばかりで、ネクタイすらしていない状態だった。急いでコンシエルジュに電話し、ヘアメイクの担当者を部屋に寄越すように言った。

沙龍としてはこのままでもいいのだろうが、汪には、洗いざらしのままの髪が気になる。

それに、どうせなら体裁は整えて出陣するのも悪くはないと思った。

「そりゃ……、大哥にしてみれば気をきかせて『そう言ってあげた』ってことじゃないのか」

張の話である。

組織の中央で逆風を浴びるのが嫌だったから、自ら一線を退くことにした、ということではないのか――。

「そんな繊細な人には見えないけど？」

あっけらかんと言う沙龍に、汪は「ガキが分かったようなことを……」と聞こえるようにひとりごちた。

サングラスをかけてしまったよそ行きの顔では、その独り言も本音なのか冗談

なのか、分かりにくい。

汪が急かしたせいで慌ててやって来た美容師の女性は、言われた仕事をしながらも、幽霊のように二人の会話は聞こえていない振りをしている。

が、この部外者が現れてからは、二人も当たり障りのない言葉を選んでいた。

「口の悪い伯父さんと生意気な姪っ子」にでも見えれば一番いいのだが、そのまま健全は無理なら「ロリコン癖のある金持ちの中年と金に困っている不良少女」でもよかった。いずれにしても「マフィアのボスとその部下」に見えなければいいのだ。

二人きりの時でも、沙龍が汪にぞんざいな口調を許しているのは、汪には演技ができないと見抜いた上で「普段通りにせよ」と言ったからだ。でないと、大根役者の見るに堪えない芝居を見なければならなくなる。

「あ、お団子はもう少し下にして。耳のちょうど上くらい」

「かしこまりました」

沙龍が女性にダメ出しをしているのは「その方が可愛いから」ではない。

恐らく、なにか、実用的な理由があるのだろう。

それが分かるくらいには、色々な意味で濃い二週間を過ごした。

そして、あの海千山千の張大哥を十代の小娘がどうやって口説き落としたりしたのか、汪の興味は、今、そっちへ向いている。

張はキッズ・ポルノを嫌っていたくらいだから、ローティーンにしか見えない沙龍の色仕掛けは通用しなかったはずである。

もつとも、沙龍が色目を使ったとも思えない。色目を使われた自分が言うのも変だが、自分がそういう対象になったのは「初恋の人に似ていたから」であつて、李沙龍は本質的には色狂いではないと思うのだ。

これで、自分も本当にロリコン中年だったなら、この「お守り役」は適当に楽しめたはずであるが、不幸にして、汪もキッズ・ポルノは嫌いだし、子供みたいな身体をした李沙龍を抱くことは苦行に近かった。あの棒のような色気もなにもない裸を見るのは、難民キャンプの飢えた子供を見るようで嫌なのだ。

なんととはなしに美容師の手元を見つめていたら、彼女も汪の視線に気付いたらしく、顔をあげた。視線が合う。

が、彼女の方は慌てて目をそらした。

黒いスーツに黒いサングラスをした男を怖がらない女は居ない。

美容師は幽霊に戻って、沙龍の髪を結い上げる作業に戻る。

(慣れた手つきだな)

汪はそう思って、まだ彼女の手元を見ていた。

大人の雰囲気は申し分ない。二十代後半くらいだろう。

自身はそれほど化粧っ気のない顔をしているが、金持ち連中を相手にする商売らしく、身なりには崩れたところがなかった。

腕をまくったYシャツに細めのサブリナパンツ、腰のあたりには作業用のエプロン、という仕事人特有の地味なスタイルである。それが却って好ましく映った。沙龍が居なければ、口説いているところである。

しかし――。

プロの手によって出来上がった『作品』を見て、汪は少し思い直した。

女は化けるもんだとつくづく思う。

普段、三白眼の沙龍は、えも言われぬ迫力があるのだが、それが太いアイラインで誤魔化されていて、妙に「可愛く」なっている。綺麗に整えられた眉もバラ

ンスが非常にいい。

彼女が帰る時にはチップをはずんで、

「また頼むかもしれない。……名刺は？」

こつそりと聞いた。

名刺は持っていなかったが、女性はメイと名乗った。指名してくれれば、すぐに行く、とも。

このホテルは沙龍が定宿にしているので、また会う機会もあるだろう。

どうせ、気まぐれなボスはすぐ自分に飽きるはずである。その時には、ああいう堅気の女性と付き合うのも悪くはない。

そう思っていたのだ。

まさか、二年半もこんな悪夢が続くなんて、この時は思ってもいなかったものだから――。

既に陽は落ち、街は夜の装いになっている。

週末ということもあって、外灘ワイタンはいつも以上に賑わっていた。ここは観光客にも特に人気のエリアである。

沙龍は渋滞の中をゆっくりと進むリムジンの中で、大きな肉まんを食べている。

そろそろお腹が空いたと言いつつ、出さずであろうボスのために、汪が急いで用意させたものだ。

食に関して言えば、沙龍は『我がままお嬢』そのものである。

すぐにお腹が空いたと言いつつ、食量はいつも汪の想像をはるかに超えているし、基本的に美味しい物しか見向きもしない。

何故こんな相撲取りのような食生活で、この棒のような身体なのだろうというのは、汪の最大の謎なのだが、実は、毎日、ひそかにハードな鍛錬をしているのも知っている。董天を始め、蒼龍会の武術部門には優秀な教官が何人か居て、稽古をつけているのか、つけてもらっているのかは分からないが、とにかく、彼らは日々、己の技を研鑽しているのである。

汪も、香港時代に柔術はかじったが、厳しい稽古はとて続かなかった。出入

りは専ら銃に頼っている。

「んー。進まないねえ……」

何度目かの信号に引つかかった時、沙龍が零した。

今日の渋滞はいつもよりひどい。

「すみません、小姐」

彼のせいではないのだが、運転している浅黒い男が半分振り向いて謝る。

内モンゴル出身の、珍しい経歴を持っている男で、漢民族だらけの蒼龍会では異色だった。

無口なところが気に入って、沙龍自身が老板直属のボディガードとして選んだ男だ。先日の、汪との会見の時も影のように控えていた。本名は長い上に発音が難しいので、沙龍は簡単に「シュウ」と呼んでいる。

もう一人、助手席に座っている若い方は偽老板の孫で「ユン」という。二十歳になるかならないかという年齢だった。同じボディガードではあるが、性格はとも極道向きとは言えず、武道大会では優勝するが、戦場では人を殺せないという典型的なタイプだった。優しい顔立ちにそれは顕れている。

そのユンが端整な顔を見せて、言った。

「どうも、この先で交通整理しているみたいですね。自分が歩いて様子を見てきましようか？」

沙龍は即座に目を吊り上げる。

ユンもそれに気付いて、しまった、という顔をした。

「こら」

「ご、ごめんなさい」

「表向きの現場監督は汪なんだから、私に言っちゃダメだって、何回言わせんの」

「ごめんなさい、つい——」

この性格なので、極道の世界からは早く足を洗わせてやってほしい、と偽老板には頼まれている。

沙龍もそのつもりで、早く本人から「やめさせてくれ」と言ってこないかな、と他力本願に思っているのだ。

「別にやめても殺さないから（そこまで重要な人物じゃないし）」と本音で説

得しても、本人はものすごく単純にして幼稚な憧れをこの世界に抱いているらしく、一向にやめる気配がない。

だったらアクション・スターにでもなったらいいのに、と沙龍は思っているのだが、今のところ、映画会社に知り合いは居ないのでその案も保留だ。

が、機会があったら、本気で放り込むつもりでいる。

このままでは、ユンは呆気なく死んでしまうだろう。早ければ今夜にでも。

「ユンとシユウは車で待機。できれば現場の反対車線側がいい」

「え？ 何故です——？」

ユンが聞こうとしたら、沙龍は自分の頭をトントン、と指した。分からなければ考えろ、という意味だ。

シユウが心得ているようだったので、それ以上、沙龍は何も言わなかった。

「じゃ、歩きのデートといきますか、ミスター」

沙龍の提案にうなずいて、汪はリムジンから先に降りた。

ボスが降りるのを待って、ドアを閉めたりはしない。ここから先は「蒼龍会の羽振りのいい幹部と、どこかの高級娼館から派遣された少女」だからだ。

車内に残った二人に、助手席の開いた窓から汪が声をかける。ユンが終始心配そうな顔をしていた。

「対応は臨機応変にな、ボーイズ」

この稼業ではその一言に尽きる。

例えば、一時間後の修羅場で、通りの店が吹っ飛ばされようが、通行人に死者が出ようが、ひたすら主人を待っているようではとても生き残れない世界である。

沙龍は汪の腕に自分の小枝のような腕を絡ませて、歩き方もちゃんと「蓮つ葉な女」を演じていた。

董天の話では、特に工作人員のような訓練はしていないということだが、こういうのは天性なのだろう。観察眼に優れ、それをなんの照れもなく実行できる――。つまり、王者の余裕がなせる技か。

「それで？ 今日、一人で乗り込もうと思ったのは、部下に密告者が居るか
ら？」

沙龍がこっそりと耳元にキスするように聞いてきた。実際、唇は何度か触れ

た。

「ここであつとりしてはいけない。」

もとより、こんな子供の行為に惑う汪ではないが、この二週間で嗅ぎ慣れたシヤネルの香りには少しクラツときた。名称などは知らないが、確か、薄いピンク色の容器である。リッツカールトンの洗面台にいつも置いてある。

「まあ、そういうことだ」

「フーン……。買収されちゃうのは珍しくもない話だけど、切れ者の『ミスター汪』の部下に裏切り者が居るなんて分かったら、老板が悲しむよー？」

「悲しむだけ、か」

「まあ、今んところ」

「分かつてる。そっちは明日にでも始末はつけるさ」

「吹いたね」

「おいおい。極道歴は俺の方が長いんだぜ？」

「悪かったね、センパイ」

傍目には、ちゃんと、お酒も入ってご機嫌なイチヤイチャカップル（ただし一

晩限りの）に見えているが、交わしている会話は物騒なことこの上ない。

『飛燕^{フエイヤン}』と名乗る集団が、この半年、外灘で好き勝手に荒稼ぎしているのは、上海市民のある層にはだいぶ知られていた。

上海市警も、観光地だけに、取締りを強化しているので、最近はいきなり蒼龍会の息のかかった店を爆破するようなことはなくなった。

が、敵は明らかに『蒼龍会』を挑発しているのだ。その挑発に乗ってくれないから、拗ねた不良少年たちが外灘を荒らし続けている、と言ってもいい。

しかし、蒼龍会に喧嘩を売るなど、少しでもこの世界に身を置く者なら信じられないような、もはや『珍事』のレベルだった。

とすれば、喧嘩を売ってきた相手は、何も知らない赤ん坊か、妖怪に対抗できる力を持った者である。

汪は、当然のように、後者だと思っていた。

覚せい剤で頭の飛んだ若者たちに、そんな度胸も知恵もあるはずがない。

といって、今、この大陸に巢食う妖怪に対抗することができるのは、人民解放軍くらいしか見当たらないのだが、その国家機関も『蒼龍会』の敵になるはずは

なかった。

何故なら、両者は実に百年近く、共存の関係にあるからだ。

だとすれば、これは結局、身内の争いなのではないだろうか——？

この件を任されて、調べを進めていくうちに汪はそう確信した。

沙龍は気付いているのだろうか？

もし、気付いているのだとしたら、このリーダーは、ものすごく辛抱強いか、ただの面倒くさがりか、きつと、どちらかだろう、と思った。

江海関（※外灘で有名な建物）の時計は夜八時を指している。観光都市の八時はまだ宵の口だ。

中山東一路通りに並ぶライトアップされた建物群は観光客たちを惹き付けてやまないらしく、ここにはさまざまなる人種が溢れかえっていた。

その人混みの中を少し歩いて、南京東路を左に曲がった。

有名な東方明珠電視塔（※テレビ塔）は沙龍と汪の背後にある。明るい夜景の中でも、それはひとときわ目立っていた。

「外灘に来るとき、初めてここに連れてきてもらった時のことを思い出すよ」

「そんな思い出を振り返る歳でもないだろうに」

汪はいつものように「やれやれ」という顔で苦笑する。

彼に言わせれば、子供が子供として振舞えないのは、嘆くべきことなのだろう。

「無理言っで連れてきてもらったんだ。張は優しかったからね。董天は、ド田舎から連れてきたばかりの子供を外に出すのを渋っていたけど、どうせ、あのままじゃ、私はいつか暴走しただろうし」

「張大哥が連れ出してくれたのか？」

「うん、テレビ塔のものぼったよ。展望台でお菓子を買ってもらったの、覚えてる」

「……“らしい”な」

張は、道端で貧しい者には施しを与えるし、女性が困っていれば、腰を抱いて話を聞こうとする（これは大抵迷惑がられるが、美男子なのでそのままナンパが成功してしまうこともある）。子供の面倒見もいい。だから、人気があるのだ。

汪は、沙龍の語る昔話を聞くふりをして、サングラスの下では狡猾に計算して

いた。

沙龍が「鉄さん」に出会ったのは十歳の時だ。まだ上海にはあまり馴染んでいなかった頃だと言っていた。

ということとは、テレビ塔見学はそれより少し前の話だろう。九歳頃か。

ならば、李沙龍が、蒼龍会の誇る第三部隊（※軍隊経験者ばかりを集めた特殊部隊）によって拉致同然で上海に連れてこられた年は……、

（一九九〇年。六年前、か。俺はハノイの退屈な長期出張を終えて、上海と広州を往復していた頃だな）

まさか、その頃、本部の連中がこんな厄介な子供を困っているなど、夢にも思わなかった。

伝説の神獣『黄龍』と、その力を身に宿す者――。

相応しくない者がその力を無理に得ようとする、五体はバラバラに砕けるとも言われ、明代のとある皇帝は己の才覚に自信がなかったために、その伝説を追うのをやめたという話もある。

黒猫は自信満々で『黄龍』を飼い慣らすつもりでいたのかもしれないが、結局

は、油断して、大事なペットに喉元を食い千切られ、黄浦江に沈められてしまった。

哀れなものである。

「上海に来るまで、私は、荒れた大地と、山と、砂丘しか知らなかったからね。この街の景色には正直驚いた」

「そりゃ、移動手段が馬だけなんて、三国志の世界だからな」

「都会の人は馬に乗れないらしいね。まあ、見かけないもんね。上海って、馬、居るのかな？」

「ちよっと郊外に行けば、乗馬クラブくらいはあるんじゃないか？」

「お金払って馬に乗るの？バカバカしい」

そんな話をしながら、南京東路沿いの建物を目指す。

大きな百貨店の隣、こじんまりとした細いビルのはずだ。

「そういえば、テレビ塔にのぼった初めてのデートの時、張が言ってたよ」

ふと思いついたように言うのだが、沙龍がホテルを出てからずっと言いたかったのは、次の言葉だったのではないかと汪は後になって気付いた。

「なにを？」

「誰も居ない墓だらけの田舎に帰るのも、この絶景を手に入れるのも、お前さんの決断一つだ、って——」

「……」

汪が目を見開いて沙龍の顔を覗き込むと、沙龍は汪がよくやるポーズで両手を広げてみせた。

沙龍は、汪の疑問に答えてあげたのだろう。

この小姐は、どうやってあの張大哥を口説いて黒猫を裏切らせたのか？

なぜ、あの曲者の張が李沙龍の軍門に下ったのか？

なんのことはない。

その時点で、張はとっくに黒猫を見限っていたのだ。

そして、李沙龍に天下を取らせようと動いたのは、張の方だったのである。

「じゃあ、なんで香港に……」

汪は言いかけたが、沙龍が片手を挙げてそれを制したので、話はそこままでになった。

くすんだ灰色の、年季のはいつた建物が見えてくる。

と、同時に、黒いリムジンが、中央分離帯の向こう側で静かに停車したのを沙龍は確認していた。

「敵は何人？」

小さな老板の瞳が鈍く光った。

「情報では四人。威勢だけはいい、若い連中だ」

「オツケー。残すのは一人でいい。できれば一番いきがってるヤツ」

「了解」

短く告げて、汪は細いビルの裏に回った。

防弾チョッキも着ていない沙龍を一人にして、さらに囧に使っていいのだろうか、とはもう思わなかった。

呼び鈴をしつこく鳴らすと、目のぎよろりとした若い男が出てきた。まだ二十歳にはなっていないだろうという風貌だ。

不健康な生活を送っているのだろう。顔色は悪い。

破けたGパンの上に赤いアロハシャツのようなものをだらしなく着ており、金色に染めた髪の毛の根元は黒々としていた。

「どうもオ、『子猫ちゃんの館』から派遣されてきましたあ」

沙龍は満面の笑顔で言っつてやった。

宅配ピザの配達員と間違うほどのノリである。

「はあ？　なんだ？　女なんか頼んでねえぞ」

「ええー？　でも、リヤン様からもう御代もいただいていますし。住所、間違つてませんよねえ？」

と、メモを見る振りをする。

「リヤン？」

一瞬、男はギョツとしたような顔をした。

それもそのはずで、リヤンというのは彼らのリーダーの名前である。「残虐で悪知恵の効く男」と、さつき、車内で汪から聞いた。

恐らく『飛燕』はそのリヤン一人の奸智でもっている。だから、頭を押さえれば簡単に片付くヤマなのだ。

が、そのたった一人の男を探し出すことができない。上海という蒼龍会の庭でいったいどこに隠れ住んでいるのやら。用心に用心を重ねて、逃げまわっているのだろうか。

今回、この百貨店横の古いアパートが『飛燕』のヤサの一つではないかと教えてくれたのは外部の情報屋だった。

「おい、どうした？」

部屋の奥から、坊主頭が声をかけた。

こちらもだいぶ若いな、と沙龍は思ったが、玄関の男が何か言おうと振り返った直後、銃声がして、坊主頭は四十五口径の弾丸に撃ち抜かれていた。

「……っ!？」

アロハの男が叫ぶ前に、沙龍は頭を下げた。

パンツ

乾いた銃声が聞こえる。

沙龍のすぐ横で、アロハの男も崩れ落ちた。

見れば、眉間のど真ん中を撃ち抜かれている。狙いは正確だ。

しかも、汪は無駄弾を撃っていない。今までに、二発しか消費していないはずだ。

(ああ、そういえば……、銃の腕だけなら狙撃部隊にスカウトしてもいい、と董天が言ってたな)

沙龍はその話を思い出した。

あまり人を褒めるといふことのない董天が、「汪ってどんな男？」と沙龍が聞いた時に、そう答えたのである。

『蒼龍会』といえど、全員が全員、第三部隊のメンバーになれるほど屈強なわけではない。

大抵の構成員は、大抵の会社員とあまり変わらないのだ。体力も、精神力も、並である。だから、勘がよかったり、運がよかったりする者が生き延びるのだ。

裏口の非常階段から、窓を割って侵入した汪は、大体、十秒ほどで全てを片付けていた。

坊主頭を一発、沙龍が相手をしていたアロハを一発で仕留めた後、隣の部屋から飛び出してきた男は三発撃ち込まないと沈まなかった。

その部屋の奥には、ダンスからショットガンを取り出そうとしていた目つきの悪い男が居て、右肩に一発お見舞いし、のけぞったところを銃床で顎を殴った。

情報通り、この事務所のようなアパートに居たのは四人。いずれもユンと同年代くらいの若者たちで、なかには高校生みたいな顔もあった。

「まったく、子供に銃持たせて悪さをさせるなんて、世も末だね」
沙龍が血をよけながら部屋にやってきた。

汪は、倒れて咳き込んでいる男を乱暴に立たせているところだった。

「いや、お前のセリフじゃないだろう」

「お、さすがだね、ミスター。一番悪そうなのが残ってる」

「それがボスのご用命だったんでね」

「フーン……？」

「……と言いたいところだが、たまたまだ」

汪が肩をすくめる。

「お前ら……！ ナニモンだ！」

まだ暴れたりしないような若者は血を流しながら吼えた。

「FBIにでも見えるか？」

汪はそんなことを言っていたが、これは独り言に近い。

あまりグズグズはしてられないのだ。この悪ガキを心底ビビらせてからリヤンの元に一旦返すのが汪の仕事である。といっても、暴力に慣れた人間に普通の暴力を加えても、あまり効果はない。

汪はコルト・ガバメントの銃口を若者のこめかみに押しあてて聞いた。

「名前は？ ボーイ」

「……るっせえよ！ さっさと殺しやがれ！」

反抗的な目をしたまま、汪に噛み付く。

素直に名乗ったりはしない。彼らにもストリートキッズとしての意地がある。撃たれた肩も、まだ今の段階では痛みを感じてないのだろう。

「そりゃ、＂タマ＂を潰されたまま生きるのは辛いよな？ 一思いに殺してくれってのは分かるぜ？ なあ」

汪は、こめかみに当てていた銃口を股間に向け、笑いながら二度三度突ついた。

「……………っ!？」

「ガキが、随分ヤンチャやらかしてるらしいな。この前も西路の娼館を一週間借り切ってたろう。もう一生分愉しんだんじゃないか？ ん？」

脅しかと思いきや、汪は一発撃った。銃口はわずかにずらしたので、＂タマ＂を撃ち抜くことはなかったが、＂弾＂は男の太股を貫通して床にめり込んだ。

「ヒイツ……………!」

男が情けない悲鳴をあげ、

「うわー、痛ーい……………」

沙龍が冗談のように言ったところで、汪はもう一度聞いた。

「……名前は？　ボーイ」

「……」

返答はなかったが、あきらかにその目には怯懦きょうだと苦痛の色が見える。

もう一押しかと思つたところで、動かないだろうと思つていた男の右手が急に動き、窮鼠猫を噛むといった具合で、汪の銃を持つ手首を掴んだ。

そのまま銃ごと上に持ち上げ、しばらく揉み合つたが、奪うのは無理と諦めたのか、男は隙についてダンスの向こう側に滑り込んだ。

転がっていたショットガンを掴んで、汪に向けて撃つ。

しかし、沙龍の方がわずかに早かつた。

若者が引き金を引く直前くらいに、ショットガンの銃口を沙龍が蹴飛ばしたのだ。その反動で、射線はだいぶ逸れたはずだつたが――。

汪のサングラスが派手に割れる音がした。

味方の生死の確認よりも、敵の意識を奪うことに専念したらしい沙龍は、教科書のように模範的なやり方で男の頸椎を強打していた。

いつ、背後に回つたのだらうという動きだ。とても素人には見切れない。

男は人形のようにドサリ、と床に倒れた。

「……名前を聞きそびれたな」

やや間延びした汪の声がして、沙龍はため息と共に苦笑した。

「じゃ、オハラシヨウスケとでも」

「なんだ？ それは？」

「私もよくは知らない。鉄さんがよく言ってた。今日は俺はオハラシヨウスケになる、とかなんとか」

「……」

汪が目を押さえているのは、さつきサングラスが吹っ飛んだ時に衝撃を受けたからだ。血は出ていない。

沙龍がやって来て、押さえている手をゆっくり外させた。

そして、指を三本立てて、

「見える？ 何本？」

事務的に聞いた。

「……三本」

顔を近付けて、覗きこむようにするので、汪は腰をかがめてやった。背の低い沙龍には、色々な場面で色々なハンデがある。

「眉毛の上がちよつと切れてる。あとは大丈夫みたい」

「死相は、消えたか？」

沙龍はフツツと笑った。

「もともと出てないよ」

そう言つて、頬を軽く叩く。

その表情は「手間かけさせんなよ」という叱責ではなく、「何もなくてよかつたね」という親しい者のそれだ。

「……」

たまにはこんな普通の顔もするのに、と汪は思う。

死体がごろごろ転がっているこんな場所で、普通の顔もなにもあつたものではないが、少なくとも、今、目の前に居る沙龍は、普通の女の子だった。とても、マフィアの老板には見えない。

「で、シヨウスケはどうする？」

「このまま放置する。リヤンのところに泣きつきに行くなら儲けもんだが」

「そこまで馬鹿かな？」

沙龍の探るような顔に、汪は言ってやった。

「こいつらは、別に訓練された工作人員でも、興信所の人間でもないんだぜ」

「フム……」

あまり長居もしてられないので、足早に去ることにした。

銃声を聞いた近隣の誰かが通報している可能性もあるので、表に出る時は用心したが、今のところ赤色灯は見えない。

こういう時、もしパトカーが到着しつつあれば、彼らが注目するのは現場のすぐそばから逃走する車であって、中央分離帯を超えた反対車線には大して注意を払わないものだ。

沙龍が「反対車線側で待機している」と言ったのもそのためである。

やがて、ユンを現場に残してリムジンは走り去った。

“シヨウスケ”は救急車を呼ぶようなことはなく、それから十五分くらいすると裏口から出てきて、ヨロヨロとした足取りでタクシーを拾っていた。

ユンは時間を確認し、タクシーのナンバーを控えた。

追いかける必要はない。男をどこで降ろしたかは、タクシー会社に聞けばいいだけである。上海のあらゆる機関、施設、会社に鼻薬を嗅がせてあるのが蒼龍会なのだ。

街の覇者とはそういうものである。

深夜になって、ユンから沙龍のもとに電話があつた。シヨウスケが繁華街から外れた個人病院に入つていったこと、今夜は入院するらしいことを報告してきた。

ユンもシユウも沙龍の部下なので、沙龍に報告をするのはしようがない。

しかし、もともと外灘の件をなんとかしろと汪に言い渡したのは沙龍なのだ。

その沙龍が、汪の仕事をややこしくするわけにはいかない。

「あのねえ……、現場監督は汪だと言つたでしょ。今、私に報告したことを、逐一、同じように、汪にしといて」

「す、すいません。分かりました」

「もう寝てるかもしれないけど……、まあ、それは気にしなくていいよ」

「はい」

ブラック企業の社員よろしく朝から忙しく働いているのに、昼間は沙龍に呼び出され、夜は夜で銃撃戦とくれば、汪も疲れているだろう。一時過ぎというこの時間は、確実に寝ているはずだ。

外灘が見下ろせるリッツカールトンの一室で、沙龍は、汪のアパートがある静安区の方を見た。

まだ行ったことはないし、独身男の汚いアパートに行くつもりもないのだが、この夜景の中に、自分と夜を重ねた人間がまだ生きているのだと思うと、少し安心できるのだった。

それが、若すぎる『老板』になってしまった李沙龍のリラクゼーションだといえ、そうなのだろう。

自分が特殊な環境に居ることは承知している。

十五歳といえ、学校で勉強し、友達と遊んだりする歳なのだという事

知っている。

しかし、世界の裏側では、貧しい農村から売られてくる子供たちが確実に居て、彼らは男も女も蒼龍会の息のかかった店で綺麗に着飾り、幼い顔を化粧で誤魔化し、今日も客を取っている。

その過酷な人生に比べれば、自分の今の境遇など天国に近いと沙龍は思っていた。

沙龍は九歳まではとある内陸の村で暮らしていた。その場所は地図には載っていない。

漢王朝が崩壊した後に、龍脈の秘密を知る者たちだけが集い、自然発生的に出来上がった集落である。

彼らは代々、龍穴を守り、そこに出現するであろう黄龍と、そのハンドラーたる保持者を守る役目を自らに課した。

龍は、この大陸の守護神であり王者である。

中でも、黄色が至上とされるのは、五行思想における「土行」がそうであるように、黄色はこの大地、大陸そのものだからである。

五行思想では、中央の「土行」の四方を囲む形で、「水行」「木行」「金行」「火行」が配置され、それぞれが方位を司っている。東の木行は青龍と名を変え、四神の一つにも数えられるのだ。

青龍、すなわち蒼龍は、最初から黄龍を守護する存在なのである。

蒼龍会の創始者がそれを意図してこの名前をつけたのかどうかは分からないが、彼らもまた、黄龍という絶対者の下僕であった。

だから、黄龍の保持者たる李沙龍が、蒼龍会を支配するのは宿命のようなものだった。

張はそれを知っていたのだ。

rrrrr ……

携帯電話の初期設定の呼び出し音が鳴る。

ユンの電話で起こされたことを怒っている汪が、鬱憤を晴らさずにはいられず、掛けてきたのだろう。

だから、第一声は、

「愚痴は聞かないよ」

そう言った。

「愚痴……？ いや、直通ラインを確保してくれた礼と、明日のお誘いのためにかけただけなんだがな」

しかし、声は明らかに不機嫌だった。

というよりも、やはり眠いのだろう。

「明日？ なんかあったっけ？」

沙龍はわざとすつとぼけた。

本当は分かっている。

先週も似たようなことを言っ、買い物だの食事だのに付き合ってくれたのだ。

汪の申し出は有り難い。

彼にしてみればデートも仕事のうちなのだろうが、それでも、沙龍は退屈な日曜日を一人で過ごさなくていいことにホッとしていた。

一人でホテルのジムなどを利用していると、日本人の観光客にはナンパされるし、西欧人たちには心配されてしまうのだ。

要らぬトラブルを回避するためにも、やはりまだ保護者は必要な歳なのだと思っても思い知らされる。

「何もないだろうから、どこかに行かないか、と言ってるんだ」

「ん……。じゃあ、ちよつと遠出したいな。蘇州とか……」

「それくらいならお安い御用だ。車はなにがいい？」

「車？ なんでもいいよ」

沙龍は田舎育ちのせいか、そういったものにはほとんどこだわりを見せない。いまだに馬を懐かしがっているくらいだ。

自分を着飾ることに興味はないので、服も宝石も欲しがらない。

が、その一方で、リッツカールトンのような一流ホテルを定宿にして、朝食を一流料理店から取り寄せたりもする。

どちらが本当の顔なのかは分からない。

ただ、表向き、上海にそつなく馴染んでみせているが、本当は都会暮らしがストレスになっているのではないかと汪は心配していた。

「じゃあ、俺のメルセデスクーペで行こう」

「……密告者の件はどうなったの？」

「それはさっき片がついた。あんたのもう一人の部下を借りた」

「シユウを？」

「早いな、と沙龍は思った。」

確かに、シユウとユンを使っている、とは言ったが、三時間前の話である。

「まあ、そっちについては、少々ややこしい話がある」

「なら、報告は明日聞くよ。おやすみ」

「……晚安、小姐」

そっけなく電話を切った後、沙龍は少し後悔した。

（わがまま言って、来てもらえばよかったかな……）

このエグゼクティブ・スイートを一人で使うのは広すぎる。

静まり返ったフローリングは、どこまでも冷たかった。

音楽でもかけよう、とラジオをつける。どこかで聞いたことがあるような映画

音楽が流れた。ピアノとベースだけの静かなBGMである。

風呂は入った。

風呂上りに苦いビールも飲んでみた。

もう、この時間はすることがない。

(今度から、普通の客室にしてもらおう……)

バスローブのまま、大の大人が五人くらい眠れそうなキングサイズのベッドに横たわって、沙龍は目を閉じた。

徐匯区(※租界時代からの高級住宅地)にも関連会社名義の豪華なマンションがあつて、普段はそちらで過ごしているのだが、週末はホテル暮らしというのが蒼龍会の老板の伝統になっていた。

暗殺防止のためとか、好色だった先々代の女遊びのためとか、色々なそれらしい理由があるのだが、第一の理由は結局、この街の官も民も押さえておこうという蒼龍会の組織的な性格による。そのためには、金はしっかりばらまいておかなければならない、というのが彼らが過去に成功した理由であり、今も続けている習慣なのである。

(ユエ、生きてるの……? どこに居るの……? 私は完全に自由になるにはまだもう少しかかるよ……)

夢に落ちる寸前、沙龍は久しぶりにその名を心に呟いていた。

そういえば、ユンはあの泣き虫の弟に少し似ている。澄んだ瞳といい、困ったような心配そうな表情といい、二人の輪郭が夢うつつの中で重なる。

だからか、と沙龍は思った。

早くこんな世界とは縁を切らせなきゃいけないのに、完全に突き放せないのは。

蘇州は上海から鉄道で一時間弱で着く、ややこじんまりとした街だ。

車だともう少しかかるが、それでも日帰りで充分の距離である。

上海に旅行に来た者がついでに寄る街、としてそれなりに栄えているのは、「東洋のヴェニス」などと呼ばれていて、街の景観が独特であること、それから、歴史的に有名な庭園や寺などがあるからで、他には特にこれといった売りが
ない。

若者に人気があるわけではなく、どちらかと言えば、シニア世代向けの観光都市だった。

だから、沙龍がここに来たいと言いつ出したのも、汪にしてみれば理解できないが、特に追求するようなことでもなかった。おおかた、ちよつと上海を離れてみたかっただけだろう、と思つていた。

「なんだ？ 不味いのか？」

向かいの沙龍が箸を持ったままブーツとじているので汪はそう言ったのだ。箸はしっかりとエビを掴んでいるが、それが三分くらい動かない。

「いや、美味しいよ」

止まってしまったような沙龍の時間が再び流れ始める。

カリカリに揚げられたエビは無事、沙龍の口の中に放り込まれたが、とても味わって咀嚼しているようには見えなかった。

「……」

原因は分かっている。

つい先ほど、ユンが死体で発見されたという報告があったのだ。

場所は外灘からそう離れていない閘北区。発見されたのは明け方で、近所の煙草屋の主人が通報したらしい。

ユンは二発の弾丸を撃ち込まれて死んでいた。ほとんど争った形跡はないという。ユンは武術の達人だったが、いかに身体を鍛えようとも、そうやって人は呆気なく死ぬのである。

さらに、そこから百メートルも離れていない小さな病院でも、医者と入院患者

が同じように銃殺されていた。

失敗をやらかした“シヨウスケ”に制裁が下ったということだろう。医者は巻き添えを食らい、ユンは復讐の対象になったのだ。

急いで上海に戻るか、と聞いた汪に「腹が減っては戦はできぬ」などと言って料理を運ばせたのは沙龍である。

しかし、多分、最初から味はしていないだろう。

自分が何を食べているのかも、分かっていないかもしれない。

董天の話では、ユンの祖父にはもう伝えだし、葬式の準備や、担当刑事から事情を聞き出すのは別のエージェントの仕事なので、沙龍は特になにもする必要はないとのことだが、だからといって呑気にデートを続けられる気分ではない。

「死相は、俺じゃなくて、前途有望な若者の方だったか」

汪が呟くように言った。

「……」

沙龍の方は黙々と食事をすることに決めたらしい。

並べられた皿を順番に空にしている。

蘇州料理と呼ばれるそれらは、淡水魚が素材となっていて、だいたい甘辛く味付けられていた。

香港育ちの汪には田舎の郷土料理にしか思えなかったが、店の雰囲気はよかった。店内は明るく、従業員の態度もいい。地元民にも人気のある店のようだ。

今日のような事態でなければ、こんな素朴なデートも悪くはない。

「リヤンってのはそんなに切れ者なのか」

食事を終え、上海に戻る途中、車中で沙龍が久しぶりに口を開いた。

一月前に、リヤンの居場所を突き止めようとしていた汪の部下も一人死んでいく。

こちらが真実に迫ったところで、痛い肩透かしを食う。敵のリーダーは千里眼か順風耳か。そう思い始めてもおかしくはない空気が、蒼龍会の中にはあった。

「実際のところ、あんたはどう思ってるんだ？」

運転している汪は、わき見をしたりしない。

まっすぐに前だけを見て、聞いた。

「どう、って？」

「……」

なんと答えてよいものやら迷って、汪は一瞬だけ助手席の沙龍を盗み見た。氷のように硬い横顔だ。この無表情は一番読み取りにくい。

沙龍はお腹が空いている時によくこういう顔をするが、この二週間で学んだことと言えば、この顔の沙龍はあまりいい状態ではない、ということだ。

「つまり——」

説明しようとしたところで、沙龍が無表情のまま言った。

「リヤンという男が本当に存在していて、本当に天才かなにかだと思ってるのか、ってこと？」

明らかにそれを否定している物言いだ。

汪は渋い顔をしたまま、それでも満足そうに頷いた。

「……」

「……」

再び静寂の中に戻ってしまった沙龍は、なにかを考え込んでいるというよりも、なにも考えていないというのが正解に近い。

これが、人が死ぬことに慣れてしまった者の虚ろな表情であることを汪は知っている。

華やかなネオンの光の届かぬ場所で、大人の暴力に怯えながら誰かの慈悲によつて命をつなぐしかない、無力な子供たちの顔と、なんら変わりはない。

李沙龍が彼らと違ふところがあるとすれば、その生き方を「自分で選んでいゝる」と錯覚することだけだ。

汪は、沈黙は気にならなかつたが、沙龍の無表情については痛々しく思った。

ユンのことを特別に気にかけていたようには見えなかつたが、この表情をさせるには十分な人員だつたということだろう。これで沙龍が全面戦争をする気になつたのなら、「敵」の狙いはひとまず成功したといえるのではないか。

「そういえば、シユウに誰を消させたのか、聞いてなかつたね」

お馴染みの高層ビル群が見える頃になつて沙龍が聞いた。

「シンという、十年來の俺の部下だ」

「そう……」

「ゆうべ、密告の件を色々吐かせた。喋つたことも、喋らなかつたこともある。

最終的にヤツが銃を抜いたので、仕方なく殺した。仕留めたのはシユウだ。いい腕だな」

「……」

「金に釣られるようなヤツじゃなかったんだが、まあ、痛い事情をつかれたんだろうな」

「……それが、昨日言ってた『少々ややこしい話』？」

汪はなにかを考えるように黙った。しばらく走ってから、車のスピードを落とすと、路肩に停め、無言で降りる。

横目でそれを眺めていた沙龍も、倣って車を降りた。

寂れたダウンタウンだった。交通量はまばらで、人通りも少ない。

汪は、シャツターの閉まった店の柱にもたれて、沙龍が近付くと、もう少しそばに來い、という手ぶりをした。最終的には恋人がやるように沙龍を腕の中に抱え込んで、耳打ちするように言った。

「車の中では話せない。今朝、調べた時は大丈夫だったが……。念のためにな」
「盗聴器？」

「ああ。アパートには何個か仕掛けられていた」

「シンがやったの？」

「多分違う。俺は、部屋に入られたことすら気付かなかった。誰にも合鍵なんて渡しちやいないのに」

「じゃあ、誰なの？ 通りすがりのピッキングのプロ？」

茶化すように言っても、汪は取り合わない。ひどく真面目な空気のまま、沙龍を見つめていた。

濃いサングラスの下の表情は分からない。

沙龍は、汪の両手が自分の背中にあるのを感じながら、障壁になっているサングラスをゆっくりと外した。

今までにも、何度か、こうして勝手にサングラスを外したことがある。汪は、何も言わない。もともと力で屈服させられている関係だ。

「……」

ややタレ目で迫力に欠ける顔が、沙龍を見つめていた。

沙龍は恋人らしく見えるように、背伸びしてキスをした。

身長差を埋めるために、汪が自分の身体を抱き上げたのが分かる。

そして、なにかを錯覚するようなキスが終わる頃、汪がささやくように言った。

「俺のアパートを以前使っていたのは張大哥だ」

「でも、張大哥はこの二年間、香港から出てないよ」

「分かってる。上海に残ってる張大哥の腹心がやったんだろう。『リヤン』の正体も恐らくそいつだ」

「……誰？」

「第二部隊に居る、チェンチーリアン陳志良 という男だ。知ってるか？」

沙龍は黙って首を横に振った。

個人的に知っているのは、あの飴色の椅子が置いてある部屋に来ることのできる者たちだけだ。それは十人にも満たない。

第二部隊というのは、別名ホワイトカラーズとも呼ばれていて、関連会社の各部署に配置されている。表の肩書き通り、普段は真面目に会社員をしている者がほとんどで、幹部クラスになると、大きな金を右から左に動かしたり、株価を操

作したりする。

「陳が独断でやってるのか、張大哥の命令でやってるのか、それを突き止めるのにだいたい命を無駄にした」

「……」

それで？ どっちだったの？ と、急かすようなことは聞かなかつた。

汪の眉間の皺が既に答えを言っていたからだ。

「陳一人を殺すのは簡単だ。しかし、それじゃなんの解決にもならんだろう。あんたは、どうしたいんだ？」

「ヴィツキー」

「……なんだ？」

「私があなたに外灘のことを頼んだのは、この件には、もっと裏がありそうな気がしたからなんだよ」

「裏……？」

「実は内部の犯行でした、じゃあ黒幕を消しましょう——、で、消されるほど、張は馬鹿じゃない。もし、張が本気なら、『飛燕』を仕掛けた時点で、他にもい

くつか手を打って、私が気付いた頃には、既に総帥の座を奪ってた——って筋書きくらい書きそうじゃない？　なのに、実際には、他の動きは全然ない。それって、おかしくない？」

「そう、だな……」

「張に、左遷された恨みがあつたとも思えないんだよね。だって、言ったかもしれないけど、香港に行きたいと言ったのは張なんだよ。しかも、わざわざ『あまり仕事したくないから閑職で』っていうリクエスト付きで」

「……」

「あの人は、自分がナンバー1になるのはまっぴらご免っていうタイプでしょ？　ナンバー2か、できたらもう少し下でもいいから、楽しんで、毎日、綺麗な女とイチヤイチャしたいって人でしょ？　だから、私を老板にしたんだよ。自分は面倒事も、責任を負うのも嫌だから。その張が、私を引き摺り下ろそうとするってのが、すごく腑に落ちない」

「……」

薄汚れた服を着た年かさの女性が、メルセデスと恋人たちを交互に見て不審そ

うな顔をしたが、汪がひと睨みしたら足早に去っていった。

「つまり、あんたは、張大哥の腹が知りたくて、俺にこの件を任せたのか？」

「実は、それも少しある」

汪は分かるように大きく一息して、「とにかく一度戻ろう」と運転席に乗り込んだ。

上海駅からほどなく歩いたところに、これといって特徴のない地味な鉄筋ビルがある。

一見、普通の雑居ビルのように見えるが、この九階建てのビル全てが事実上の『蒼龍会』の本部になっていた。

一階は飲食店になっており、以前は大衆食堂だったのだが、今は時代の波もあり、お洒落なカフェになっている。

沙龍はいつもはこのカフェで時間を潰したり、忙しそうな時はレジを手伝ったりもするのだが、今日は直通エレベーターで最上階まで行くと、すぐ董天の執務室に向かった。

「『老板』の様子は？」

部屋の中に問うと、董天がパソコンから顔をあげて答えた。

「落ち着いたものです。まあ、かの老人も役者として過ごした半生がありますからね。仮面を被るのはお手の物でしょうけど」

「ユンは」

「まだ警察から返してもらってませんよ。司法解剖しますから、三日はかかるでしょうね」

「そうか……。董天、ユンを殺してしまったのは私かもしれない」

「沙龍様のせいではないと思いますか？」

「いや、ユンを留学させるのをのぼしのぼしにしてしまった。私の責任だから、できるだけのことはしたい、と言う。」

「葬列はできるだけ派手に、っていうのがあの一族のポリシーだろう。坊さんも気前よく十人くらい呼んでやれ」

「香典にも色をつけておきますか」

「頼む。それから、もう一人、立派な葬式を出してやって欲しいのが居る」

そう言うと、董天の細い目が、さらに細められた。

もう、これでは開いているのかどうかも分からない。

「シンですか？ ミスター汪の部下の」

「そうだ。さすがだね、董天大人」

わざとおどけて言った。

ツーカーというより、これはただの腐れ縁だ。

六年も一緒に居れば、相手が何を言いたいのか分かるというものである。

「知り合いましたっけ？」

董天が意地悪そうに問う。

妙なことに首を突っ込むな、と言いたいらしい。

「いや。顔も知らないよ」

「なら、何故？ 彼は裏切り者として始末されたということですから、ユンのようにはいきませんよ、沙龍様」

「いや、シンは組織を裏切ってはいないと思う」

「意味がよく分かりませんが……」

「とにかく、できるだけ手厚く葬って欲しい。体面云々言うなら、ウチが金を出

したってことが分からないようにすりやいいんだよ。簡単じゃないか」

最後は脅しのように言う。

董天はわざとらしくため息をついて、

「私は沙龍様がなぜ顔も知らない裏切り者の肩を持つのか知りたいと言っているだけです」

「今は、分からなくていい。多分、そのうち分かる」

「……」

そう言われてしまっただけは黙るしかなかった。

それに、董天には少し心当たりもあった。

カフェのマスターはだいぶお腹まわりの贅肉が目立つ、気のいい初老である。

上海で生まれ育った上海っ子で、汪にはたまに聞き取れない上海語を喋る。

汪が沙龍を待っている間も、このマスターがエスプレッソをサービスしてくれた。

「今日はデートだったのかい、旦那」

「“子守り”だよ」

笑って言い直した。

マスターはこう見えて、生粋の構成員でもある。飲食業しか出来ないが、必要とあらば銃も撃つし、警察にも屈しはしない。

本部ビルに常に居るのだから、下手な幹部よりはよっぽど情報通だった。だから、油を売るついでに、汪の知らない話を教えてくれることもある。

「『小姐』は最近、落ち着いてきたね。よかったよ」

「……。前はそんなに酷かったのか？」

「ひどいものにも、毎日毎日、董天の野郎を殺すんだって、たいそうな騒ぎだったよ。そりゃね、小姐にしてみりゃ、一族郎党殺されたんだ。分からないじゃないが、あすこの連中だって、黄龍様を食い物にしてたんだらう？」

マスターが言っているのは、どうせ誰かの受け売りだが、それほど間違った解釈でもなかった。

例の山村に住み着いていた連中は、龍穴の恩恵を受けて日々を暮らし、やがて

現れる黄龍の力を当てにしていたのだ。

「小姐は、董天とは仲が悪いのか？」

「『殺してやる』ってのはさすがに言わなくなったが、まあ、いまだによくはないさね」

「……」

「それに、最近は、ホラ、色気づいてきたから。董天大人も父親の心境で、やかましく言ったりするのが、小姐には煩わしいのかもしれないね」

「……」

それについては、嫌な噂もある。

無口なシュウから聞いた話だ。

沙龍が前に付き合っていた大学生だったか、花屋の店員だったかが、突然連絡が取れなくなったという。本人はそれほど執着していなかったのか、必死になつて行方を探すようなことはなかったが、もしかしたら、黄浦江に沈んでいるのかもしれない、とシュウは言っていた。

（一般人とは付き合うな、と董天に言われたが、それを聞き入れなかった、って

ことか)

汪はそう思った。

沙龍の行動は、常に監視されている。

六年前は文字通り「監視」であったものが、今は多少意味を変えているとしても、本人にとって息苦しさは変わらない。

汪が堅気の女と付き合おうが、どこからも文句は出ないが、未成年の沙龍のプライベートには敏感にならざるを得ないのだ。

(それで、『俺』なのか。まったく、董天も酷なことをする)

苦いエスプレッソを温かいうちに飲み干して、しばらくすると、沙龍が降りてきた。

一階の店内に汪の姿を認めて、少し驚いた顔を見せる。

それから、おもむろに腕を組んで、じつとこちらを見つめてきた。

「なんだ？」

汪が両手を広げて見せると、

「待ってろって言ったっけ？」

「いや？ コーヒー飲んでただけだ」

「あ、そ……」

沙龍はそのまま歩いて帰ろうとしていたので、汪は三秒待ってから追いかけた。

しかし、車で送ると言っても聞かない。いつになく頑なだった。やっと口にしたのは、

「マスターから、なんか聞いたでしょ？ そういう顔してる」
そんな一言だった。

恐るべき女の勘である。沙龍こそ盗聴器でも仕掛けているのではないかと疑いたくなる。

「まあ、聞いたとしても、たいしたことじゃない」

「そういう同情っぽい目をされるのは腹が立つの」

「サングラスしてるのに、分かるのか」

「分かるよ。ホラ——」

と、沙龍は少々乱暴に汪のサングラスを外して、奪った。

「鈍感な男の方がよかったとは言わないけど、色々と頭の回る男はこっちが疲れ
てしまうね」

そんな捨てセリフを残して、さっさと行ってしまった。

どうやら本当に自力で帰るようだ。

バスも鉄道も、地元っ子のように使いこなしている沙龍のことだから、迷子に
なることはないだろうが、『蒼龍会』の老板を一人歩きさせるわけにはいかな
い。

立ち止まってしまった汪は周囲を見渡した。シュウがカフェの奥に居たのを
知っていたので、そちらを見ると、既に浅黒い顔をしたボディガードは「小姐」
を追いかけていたので、視線を交わし、任せることにした。

「あ、サングラス……」

大事なレイバンを持って行かれてしまったことに気付く。

新しいのを買に行くか、と汪は眩しい空を仰いだ。

5 沙龍の秘密

ユンの葬式を済ませてから、数日が経っていた。

十二月に入り、日中もかなり冷え込む日が続いている。

しかし、ボスの要望で、本部ビルの九階はフロアー全体の暖房を切ってあった。

老板役のご老人にはかなり応えるだろう、と汪は心配なんだか文句なんだか分からぬ愚痴を零したが、本人に「体は鍛えておりますので心配ご無用」と言われた。

加えて、董天は一年中涼しい顔をしている男だし、シュウは零下三十度にもなる内モンゴル出身なので寒さには慣れている。そして、暖房をつけるなど言い出した沙龍は特殊体質で、ほとんど寒がらない、とくれば、汪がエアコンのスイッチを勝手に押すわけにはいかなかった。

（まったく、妖怪どもが。俺は普通の人間なんだよ）

部屋の中でもコートを脱げない汪は、董天の執務室で丸くなっていた。

沙龍は、別のフロアーで勉強中なのだから、ちよつとくらい暖房をつけてもいいじゃないか、と言いたいのだが、誰もその案に賛成してくれそうにない。

嫌味に近い口調で「凍死しそうなんでものすごく熱いお茶をくれ」と秘書のシヤオチュン小春に言った。

小春は董天の秘書であつて、汪の秘書ではないのだが、嫌な顔ひとつせず、テキパキと動く。

一見、ごく普通のOLに見えるが、この最上階のフロアーで働いているということは、それなりの背景と覚悟を持っているということである。

「寒くないのか？」

お茶を出してくれた小春に聞いたら、やはり「鍛え方が違いますから」とニツコリ言われた。

「……別に、暖房つけてもいいんですよ。沙龍様にネチネチ怒られてもいいなら」

頬杖ついた董天が、これまた嫌味たっぷりと言うのだが、これは無視した。

沙龍は、平日は家庭教師をつけられて、勉強をさせられている。

普通の中学生が習うことと、普通の中学生が習わないようなこと、すなわち、蒼龍会の老板が知っておかねばならぬような知識を、詰め込まれているのだ。

当然、専門分野が分かれるので、何人か家庭教師が居る。面子は、引退した経済学者だったり、現役の医者だったり、と様々だ。蒼龍会の息のかかった者がほとんどだが、「病弱で学校に通えない子供に義務教育レベルの勉強を教えてやってほしい」というふれこみで来てもらっていた大学生は、本当に何も知らない一般人だった。行方不明になった例の学生である。

体育の時間に、沙龍の相手をするのは武術部門の精鋭だった。

といっても、武術に関する限り、沙龍に新しく教えるようなことはほとんどなかった。生まれ育った山村で、既に武当術（※中国武術の一派）をマスターしていたからだ。

勉強が終われば、沙龍には『蒼龍会』の通常の仕事が待っている。幹部たちと会って、報告を聞いて、指示を出さなければならぬのだ。一日の自由時間はなかに等しい。

その分、土日は一流ホテルで好きに過ごしていいことになっていた。お金も使いたいだけ使えばいい、と董天は言っている。

が、物欲がない沙龍は、食事代くらいしか使わない。

なら、どこでストレスを発散させてやればいいのだろう、と周りの大人たちはみな思っていた。

「李沙龍は、もしかしたら湖北出身か？」

新しいサングラスを湯気で曇らせながら汪が聞いた。

熱い烏龍茶は、まだとても飲めたものではない。顔にその湯気を当てるだけにした。

「おや、なんで分かったんです？」

大して感動もしていないような口ぶりで董天が言う。

「いや、なんとなく……。そうだな、あの喋り方か」

「沙龍様に、訛りなんかありましたか？」

董天は、一瞬、顔をしかめた。

汪はそれを見逃さない。

「いや、訛りじゃない。多分、何気ない言葉使いだな。前に湖北出身の女と付き合ったことがあるんだが、それに似てる気がした」

「なるほど……」

「なんだ？ 訛りや癖があったら困るのか？」

「まあ、一応、出身地は内緒ってことになってますから」

「ああ、そういうことか。しかし、湖北って言ったって、広い。その、伝説の一族の村がどこにあるかなんて、俺は興味もないし、探す気もないが？」

「あなたにその気がなくとも、黄龍様にあやかりたいって人はいっぱい居るんですよ。実際、その伝説を鵜呑みにして、黒猫が『黄龍探しをする』なんて言い出したんですから」

「まあ、そりやそうだろうが……」

「だから、私は沙龍様に、いっさい訛りのない普通話を教えたんです。出身地が分からないようにね」

「しかし、今は上海語訛りになってるだろ……？」

「わざと、地元っ子ぽく見せるためにそうしてるんですよ。普通話を教える過程

で気付いたんですが、あの方は、妙に耳がよくて、一回聞いただけで、大抵の方言はすぐ覚えてしまうんです。広東語、客家語、あと、モンゴル語まで。ただしチャハル方言（※内モンゴルで使われている言葉）ですが。シユウに習ったみたいですね」

「そうだったのか。英語はかなりたどたどしいんだが……。意外な特技があるもんだ。もしかして、日本語も喋れるのか？」

沙龍がよく日本語の歌を唄っているのを思い出して、聞いた。

「日本語は聞いたことありませんが……」

「でも、一時期、日本人の男に入れあげていたらしいじゃないか」

「ああ、あの宿無しの雀士ですね」

心なしか、董天の涼しい顔が、凍てついた顔になった気がする。

どうやら、彼も「鉄さん」のことが好きではないらしい。

「そう。そいつだ。一体、なんだってそんなロクでなしに引っかかったんだ？」

「血が呼んだってことかもしれないね」

それは、汪には、寝耳に水の話だった。

「……どういう意味だ？」

「沙龍様は日本人なんですよ。ご両親ともども」

「ハア!？」

熱い烏龍茶を零しそうになるくらいには驚いた。

突拍子がなさすぎて、どこにも、なにもつながらない。

「でも、中国生まれだろ？　どういう経緯で……」

「要するに、ご両親がそろって中国に渡って来たんですよ。一番、可能性のある龍穴のそばで『保持者』を作るために」

「『作る』って……？　可能性って……？　いや、ちよつと待てよ。なんだって、あんたはそんなことまで知ってるんだ？」

「そりゃ勿論、調べましたから。つぶさに。例の山村を襲撃する前に」

「はあ……。それで、どんな秘密がでてきたんだ？　俺に教えていい範囲で頼む」

「まあ、このフロアーでは秘密というような秘密でもないんですが。もともと、神獣の保持者というのは、突然変異みたいなもので、血で決まるものではなかつ

たそうです。しかし、歴史の中で、血族に受け継ぐことを可能にしてしまった者が居たらしく、さらに、どういう転変があったのかは知りませんが、その一族が、大陸を追われたか、逃げたかして、日本に流れ着いたようですね。その一族は『甲斐』と呼ばれてました」

「それは、よくある名前なのか？」

「特に珍しくもないし、かといって、よくあるというほどでもないってところですかね。戦国の武将にも見られる名前です。真偽は分かりませんが。彼らにも色々な話が伝わっていて、やがて、故郷に還って『保持者』を産み落とすことは悲願というよりも、彼らの本能だったのではないかと思いますね。それで、途中色々はしよりますが、日本人の『甲斐馨』は中国の山奥で生まれ、戦う術を叩き込まれ、『李沙龍』となって、今ここに居る——というわけですよ」

「……ずいぶん、はしよったな」

汪は苦笑したが、大体、今の説明で知りたいことは分かった。

「それで、本人は自分が日本人だってこと、知ってるのか？」

「知ってると思いますよ」

と、そっけなく言われる。

「それで、同郷の男に無条件で惹かれてしまった、ってことか」

「そう考えるのが、一番、腑に落ちますから」

「……」

そうだろうか。

日本から逃げてきた博打打ちなど、どうせ前科者で、そんな男に人間としての魅力などない。沙龍がその男に惹かれたのはただ、まだ見ぬ故郷への思いがあっただけ。そう思いたいのは分かる。

しかし、自分や董天のような極道中年に、本当の意味での乙女心が分かるはずはない。

「ところで、董天大人」

普段、呼びもしない敬称を使うのは、少し聞きにくいことを聞く時だ。

「あんた、いったい、いくつなんだ？　今までなんとなく聞きそびれていたが、俺よりは上なんだろう？」

「そういうミスター汪はおいくつでしたっけ？」

「三十二だ」

「じゃあ、それよりは上ですね」

「じゃあ、ってなんだよ」

「あまり数えてないので」

そんな話をしていると、小春が「そろそろです」と声をかけてきた。同時に、点心の準備も始める。

今日の授業を終えた沙龍が、それを董天に報告に来るのである。

「あれ？ ヴイツキーも来てたの」

いつもは居ない人の姿を認めて、沙龍が足を止めた。

「“ヴィツキー”？」

童顔な小春が不思議そうに繰り返す。

二十歳くらいにしか見えないが、本当は汪と同じ歳である。だから、お互い、同年の気安さもあるのだろう。

「俺の香港名だ。頼むから呼んでくれるなよ。女の子みたいで、嫌なんだ」

「あら、沙龍様はいいんですか？」

「ボスだからな」

当然のように言つて、両手を広げてみせる。

沙龍はそれを横目に、早速、蒸籠せいろうの中の粽ちまきに反応していた。

「いただきまーす」

その風景には、家庭的な雰囲気すらある。

汪は、さもありなん、と思つた。

一日の大半を、この面子で過ごしていればそうもなるだろう。

しかし、沙龍の本心など、誰にも分からない。

董天に対するわだかまりだつて、まだ消えてはいないはずだ。

(こいつは、根無し草だな……)

シュウと流暢なモンゴル語を喋っている沙龍を見て、汪はそんな風にも思つた。

その日の夜は、徐匯区のマンションに連れて行かれた。

疲れているなら夜のお相手はしなくていいよ、などと言われて、そうですか、ならそうします、と言えないのが部下であり、男である。

主観では充分頑張ったつもりだが、客観では十代はやはり元気だった、と言うしかない。

そのことに多少落ち込んでいると、

「五十歳の自称現役よりは全然マシだから。安心して」と言われた。

「……」

やれやれ、世も末だ、ガキのくせして、と思わずにはいられない。

盛りのついたティーンエイジャーを一晩中相手にするのは、五十歳はどうてい無理だろうが、自分だって無理だ。

同じ歳とは言わないが、せめて同年代の相手を見つけれ、と言いたいのだが、いわく「同年代はとても恋愛やセックスの対象にはならない」らしい。

やれやれ……。

「もしかして、今日は心配して来てくれたの？」

疲労困憊して缶ビールを飲んでみると、沙龍が少し申し訳なさそうに聞いてきた。

ユンのことがあってからこつち、元気がないという自覚はあるのだろう。

「いや、サングラスを返してもらいに……」

わざとそう言ってみた。

「サングラス？」

「この前、持っていっただろう。俺のレイバンを」

「ああ……。それ、ホテルだよ、多分」

沙龍の私物は一旦まとめられて、次の週末にまた同じ部屋に配置されるのが常だった。

先週は、スイートではなく普通の部屋にしてくれ、と言ってその通りにしてもらったが、今週末はまたいつもの部屋に戻されるだろう。

なんでわざわざ狭い部屋を？ と訝しがる周囲の大人たちに、自分の心情をうまく説明できなかつたのだ。

「サングラス、しなくていいのに」

キッチンの椅子で爪を切っていた沙龍が、横に来て、寝転がった。

「俺の顔は平凡すぎるから、あれがないと舐められるんだよ」

「シヤイなの？」

「そういうことにしておきたいなら、それでもいいけどな」

「……」

沙龍は何がおかしいのか、くすくす笑っている。

「夜に爪を切るなって言われなかったか？」

「そんなの知らないよ」

「子供の頃に言われただろう」

「誰に？ お母さんに？」

そう言われて、汪はハツとした。

沙龍は両親とは死に別れているのだ。

普通の子供たちが普通に経験してきたことも、知らないことが多い。

「育ててくれたお母さんは居たけど、そういうこと、聞いたことなかったなあ……」

……

「そうか。まあ、電気もない田舎じゃ、夜になにかをするって発想もなかっただろいな」

汪は眠そうだった。

声は半分くらい寝ている。

「ヴィツキーはだいぶ誤解してるよね。原始人の生活かなんかだと思ってる？」

「三国志くらいだろう、とは思ってるな」

「もう……」

先に寝息をたてたのは当然汪である。

夜を凌ぐ方法を考えなければならぬのは、どうやら沙龍の方だった。

『飛燕』の連中がなりをひそめ、陳志良をそ知らぬ顔でインドネシアに飛ばした後は、上海にも一時いっとき平穩が戻った。

沙龍は、というと、週末ごとに「遠出がしたい」と言い出すようになり、最初は車で行ける近場だったのが、どんどん距離が伸びていき、北京だ、西安だ、と飛行機でなければ行けないようなところに行きたがった。

旅行がしたい、とは言わない。どこそこに行きたい、と言うのだ。

汪がそれとなく目的を聞いても「ただ行ってみたいから」と言うだけで、それ以上を語ろうとしない。

仕方なく我がままに付き合って、一泊二日の北京旅行をしてみても、紫禁城の一日コースをめぐっただけで、やはり他に行きたい場所はないと言った。

「そのうち、外国に行きたい、次は月に行きたい、なんて言い出すんじゃないだろうな」

北京のリッツカールトンで汪が大真面目に言った。

このホテルチェーンのいいところは、顧客情報を事細かに共有しているところである。

こちらから知らせなくとも、沙龍が上海の上客だと知っていて、北京のリッツカールトンを予約すると、そこには沙龍が愛用している枕と寸分変わらぬものが用意されている。

その配慮の仕方は見事としかいいようがない。

「外国は行ってみたいけど、月に行かなくてもいいかな」

「そうしてくれ。俺はスペースシャトルには乗りたくない」

サングラスもネクタイも外して、上海のスイートにあるのと同じような柄のソファに身を投げ出す。今日は歩きっぱなしで疲れた。

沙龍は今日、故宮博物院で買ってきた土産物をテーブルに並べている。絵葉書や花瓶のミニチュア、キーホルダーといった他愛のないものたちだ。

「それで？ どうして北京に來たい、なんて言い出した？」

答えてもらえないのを承知でまた聞いてみる。

「なんで都のお城を見てみたかっただけだっと思って思わないの？ 私だっっておのぼりさんだよ。ずっと田舎で育って、上海に来てからもほとんど街を出てないんだから」

「……。百歩譲って、仮にあんたが普通の女の子だったら、それを信じてもいい。しかし、違うだろ？ 目立つ都市、それも、歴史的な目玉建築がある街にだけ行きたがるなんて、なにかあると勘繰られて当然だ」

「……」

さすがに勘だけはよく働くんだな、と沙龍が思ったかどうかは分からない。

ただ、董天ならもしかしたら、しばらく気付かなかったかもしれないことも、汪には分かるのだ。

何故、といえば、汪が普通の『できる人』だからだろう。

沙龍は、本人を始め、周囲に待る大人たちも、やはりどこかズレているのだ。

董天にしろ、シュウにしろ、普通じゃない。

だから、汪は、普通の勘で、沙龍の「どこそこ行きたい病」がただの気まぐれではないと確信していた。

「私だって普通の女の子だよ。いつもは、そう思ってたが、くせに」

「なんだそりや？ “思ってたが” ……？」

「だって、そんな感じがする」

その感覚をロジカルに説明するのは難しい。

董天はこういったあやふやな答え方を嫌うが、沙龍は、常に模範解答を求める董天を嫌っていた。

汪の前では、いくぶん気が緩むのだろう。

「俺は…、いや、あんたが同情されるのは嫌だと言ったから、特別扱いはしないようにしてる」

「同情するしない、と、特別扱いするしない、は、別じゃないの？」

「そうかもな。だが、重なる部分もあるだろう」

「……」

「だから…、その…、普通の女の子だと、思うようにしてる部分は、確かにあるのかもしれない。が…、ところで『普通』ってなんだ？」

うまい言葉が見つからず、そんなことを言い出した。

「ねえ、ヴィツキー」

「……？」

「まともじゃない世界では、まともな神経で居られるはずがないんだよ。だから、私は、私たちは狂ってるはずだ、と思うよ」

自分が狂ってるのだと信じなければ、やってられない。

沙龍はそう言いたいのだろう。

「故郷の村に居た時は、人が死ねば悲しんだし、誰かの命を奪った時は落ち込んだよ。でも、今はそんな普通の感覚が麻痺してる」

「ユンが死んだ時、あんたは悲しんでいるように見えたが」

「いや……、違う。仲間が一人死んだってのに、悲しんでいない自分に呆然としていただけさ……」

「……」

例えば、人が戦場で鈍感になっていくのは、生存本能みたいなものだろう、と汪は思う。

人を殺さないと自分が生き残れない世界では、感情は切り離さなければならな

い。鈍感であれ、何も考えるな――。

それは、狂っているのではない。非常に正しい人の姿である。少なくとも、汪はそう思っている。

二人の話をさえぎるように、ルームサービスがきた。

「……あれ？ なにか頼んでたの？」

「中途半端な時間だからな。店の予約は七時だ。まだ二時間近くある。お腹が空いただろ？」

汪は、職にあぶれたらどこかの社長秘書になればいいと沙龍は思う。

それくらい、端端に気が利く男である。

軽食を持ってきてくれたボーイに、汪の広東語が通じなかつたので、英語で言い直した。ボーイは了承し、チップの礼を言っただがった。

「なんて言ったの？」

沙龍はすでにクラブハウス・サンドイッチを頬張っている。

あごが外れそうな厚さだった。

ローストビーフが美味しい。

「一時間後にタクシーを回しておいてくれと」

「ヴィツキー、英語喋れるんだね」

「俺は香港育ちなんだぜ。普段は英語だ」

「香港の人って、みんなそう？」

「いや……、まあ、一部だ」

北京では当然、みな、北京語を喋っている。普通話というのは、この北京語を元にして作られた、中国全土で使える言葉のことだ。マンダリン（官話）と呼ばれているものもほぼ同じである。

が、汪はこの北京語がほとんど喋れない。彼が喋れるのは英語と広東語だけである。

コーヒーだけを手にした汪は、あまりその話題には触れて欲しくなさそうだった。

英語で育ったということは、エリート階級だったということである。それを沙龍には知られなくなかったのだ。

が、考えてみれば、「ヴィツキー」という名も知っていた沙龍のことだ。

今さら隠すようなことではないのかもしれないが、本音と建前がある世界だ。建前のところでは、隠しておきたいこともある。

「全部食べていいの？ ヴイツキーはいらなの？ 美味しいよ？」

「俺はいい。というか、残してもいいんだぞ……。今からコース料理をたらふくたいらげなければならぬんだ」

「それはそれ。これはこれ」

「……。そんだけ食って、何故太らない」

「『黄龍様』に持っていかれてるんじゃない？ って、董天は言ってる」

「……。つまり？ 妊婦みたいになってことか？」

「うん」

と、軽く言う沙龍は「妊娠したことないけど」と付け足した。

汪は「俺もない」と言っていた。

北京に来る前には、西安にも行ったし、成都にも行った。

汪が指摘したように、世界的にも名所とされる遺跡や建築物がある都市である。

すなわち、西安は兵馬俑、成都是武侯祠（※諸葛亮を祀った祠堂）。以前行った蘇州は、古典園林だろう。そこしか見ていない。

沙龍は自然遺産にはちっとも興味がなかった。

以前、汪が「九寨溝でも行くか？」と言った時は、はっきり「興味がなし」と答えていた。

「そろそろ教えてくれないか。あんたが中国各地に行きたがる理由を」

VIP用の個室でデザートを食べる段階になって、汪が言った。

北京ダックは値段のわりにいまいちだったが、フカヒレは美味しかった。

「どうして知りたいの？」

「そりゃ、子守りの身としては、危なっかしいことはさせられないだろう」

「……」

その時、

「これはこれは——」

カーテンを開け、営業スマイルを満面に浮かべたスーツの男がやってくる。蒼龍会のメンバーか、と沙龍はすぐに分かった。

歳は汪よりだいぶ上だが、文字通りの腰の低さからして、力関係は汪より下のようだ。

（店の者から「それっぽい客が来ている」と連絡を受け、急いでゴマすりに来たってところか。相手する必要なし、と）

沙龍はそう判断した。

が、ここでの自分は汪の姪っ子か、若い恋人か、金で買われた少女である。臨機応変に振舞わなければならない。

「ミスター汪、北京にいらっしゃるなら、ご一報いただきたかったですな。精一杯もてなしましたのに」

「お忍びなんでな。劉には伝えなくていい」

汪は、二、三分の会話なら構わない、という態度で答えた。

劉というのは、北京支所のナンバー1を張っている男のことだ。

沙龍も、あの飴色の椅子が置いてある部屋で、一、二度会ったことがある。

「それとも、我々の機動力をお試しにでもいらっしやった、とか？　それで、合格ですか？」

「いや、本当にお忍びなんだ。放っておいてくれたほうがありがたい」

「……」

男は、営業スマイルを崩さず、沙龍に視線を移し、それから汪を見て、一礼をした。

「そう、ですか……。なら、すぐ退散いたしましょう。しかし、なにかご不便でもあれば、ぜひご連絡を……」

と、最後は汪ではなく、沙龍をチラッと見て言ったのだ。

これは、ちよつと厄介かな、と沙龍は思った。

恐らく「ミスター汪が女連れで北京の高級料理店に現れた」という情報は既に劉にも伝わっているだろう。

劉は沙龍のことを覚えておらずである。その上で、なにか勘違いして、汪を強請るネタでも見つけた、と喜んでいるか、それとも、真実を見抜いて沙龍にゴマスりに来たか、のどちらかである。

男が去った後、汪がため息交じりに聞いた。

「どうするんだ？」

「劉はミスター汪の次に抜け目のない男だ。多分、気付いたんだろう。とりあえず、まだ芝居を続けて『気が変わった』ことにして、劉に挨拶に行こう。ちよつと話してみたい」

「……了解」

汪が従業員を呼ぶ。

劉の部下はまだ店内で油を売っていたようで、すぐ捉まった。

その後、二人は男の運転するBMWで劉に会いに行くことになった。

昼間、観光した紫禁城の近くに、劉の邸宅があった。

かつては、清朝の皇族が住んでいた家だそうである。

伝統的な四合院（※細長い敷地を壁で囲い、中庭を作り、周囲に建物を配置する中国の伝統的な建築）で、映画でしか見たことのないその建築に、沙龍は素直

に感動していた。

「わあ、綺麗だねえ」

中庭の照明が、品の良い小ぶりの竹林を照らしている。

奥の北房の造りも、今日見た紫禁城の太和殿のように立派だった。

「気に入ってくださいましたか？ 小姐」

颯爽と中庭に現れた劉は、最初に、汪ではなく、沙龍に声をかけた。

このことからしても、劉が全てを心得ていることは明白だ。

「劉大人——。お招きにあずかり、光栄です。お忍びで来たのに、お手を煩わせ

ましたね。正直、その慧眼と手腕に驚いています」

沙龍は、汪が驚くほどに、丁寧で、毅然とした挨拶をしてみせた。姿勢を伸ば

したその様は、小さいながらに『王者』である。

今日はブルーのチャイナドレスこそ着ていないが、一流料理店で食事ということでそれなりにめかしこんできている。

つまり、この凶は、『蒼龍会の王者』が、劉を『優秀な臣下』として正式に褒めたのである。

汪は、自分の時とは大違いだ、と心のうちで愚痴っていた。さっきの、沙龍の「ミスター汪の次に」という言葉がなければ、自尊心も抉られていたに違いない。

「いえ、私こそ、対応が遅れたと肝を冷やしておりました。北京でのことなら、是非、私にお申しつけ下さい。最大最高の便宜をはかることができると自負しております」

政府にも地元の名士として重宝されている劉は、年齢は五十前後、恰幅も血色もいい中年だった。

蒼龍会でも、『北京の劉』、『香港の張』と、双璧をなしている男だ。

劉は何に対しても精力的で、張とはだいぶタイプが違う。

人あたりはよく、しかし、しつかりと腹黒い、という、蒼龍会のような組織では一番長生きしそうでもあった。

劉は、中庭の、陶器でできた椅子に沙龍を座らせ、ジャスミン茶を振舞った。夜風は冷たいはずだが、温風がほのかに流れているせいで、寒くはなかった。

「北京に来たのは本当に私用で、明日にも帰るつもりだったんだ」

「しかし、ミスター汪もご同行されているということは……？」
仕事ではないのか、と劉は聞いている。

「汪は、〃子守り〃でして」

「御意」

と、従者のように控えている汪が短く言った。

「実際、二十四時間ビツタリなんで、息が詰まるよ」

沙龍が、急に態度を崩して、苦笑しながら言った。

鷹揚な態度である。

「……」

サングラスの下で汪は思いつきり怪訝な顔をしたことだろう。

「子守りの必要な歳でもないんだがな。まったく、本部の連中ときたら、過保護で困ってる。劉、お前からもなにか言ってやってくれないか」

「……」

劉は、まだ沙龍の意図が分からないので、是とも非とも言えない。
柔らかな微笑みを浮かべているだけだ。

「それで、だ……。あ、ちよつと汪は席を外してくれ」

「しかし……？」

汪は二秒ほど動かず、拒否の姿勢を見せたが、沙龍と交わした視線でなにかを感じとつたらしく、おとなしく下がった。

「なかなか乙女心を理解してくれなくてね。一人にしてくれない」

沙龍は「お目付け役に辟易している自分」を強調した。

「貴女のことの方が心配なのでしょう」

「そうだといいんだが」

「……」

「実はな、劉大人。黒猫から後を引き継いで二年。ガキが頭でいることに、まだ反発している者も居る」

「お察しします」

「ご老体が『替え玉』だと気付いてる者は十人も居ない。要するに、その中の数人だが——、ぶつちやけると二人だな」

「……」

「殺したくはない。いずれも優秀なスタッフだ。不満を持っているだけなら、目をつぶろうと思う。今後の私の働き次第では、その二人も私を信用してくれるかもしれないし」

「英明なご判断かと」

「うん、私からの話はそれだけなんだ」

「はい」

沙龍は頷いて、席を立った。

そして、思い出したように、

「そうそう。董天や汪には知られたくないんだが、人を探している。協力してくれるか……?」

「喜んで」

「名前は李偃月^{リーヤンユエ}。私の異母弟だ。年齢は十四。多分、一人でこの大陸をさま

よっている。各地に私のものだと分かる印は残してきたが、それに気付いてくれるのに、二、三年はかかるだろう」

「他に、特徴は」

「なにせ九歳の時に別れたきりだからな……。黒髪だが、顔は私に似ていると思う」

「充分です。見つけたらご連絡します。身柄は確保したほうがよろしいので？」
「いや……。さりげなく、私が生きていることと、上海に居ることだけを伝えてくれればいい」

「御意」

もう一度頷いて、沙龍は四合院を後にした。

ホテルの部屋では、不気味な沈黙が続いている。

ところどころ、苛立つような二人分の息遣いは確かにするのだが、紙を破るような音と、ペンを走らせる音しかしない。

『だから、劉にはそう思わせた、というだけで、別に、造反者が居るとは思っていないよ。あーもう、面倒くさいな。筆談、やめない？』

『でも、盗聴器が仕掛けられてる可能性は高い。要人がわんさか泊まるホテルだ

からな。少なくとも、俺が北京支部の責任者なら、仕掛けておく』

『まったく……、大人どもは油断ならないね!』

『どうして劉に仕事を頼んだんだ？　そもそも、人探しなんて、俺や董天に言うてくれればすぐやったのに。なぜ隠していた』

『なに？　すねてんの?』

『違う。外部に頼むのはリスクが高い、と言っている』

『劉は私が無能じゃない限り、信用してくれると思う。言われた仕事もきっちりやると思うし。ただ、あのタヌキが将来、野心をおこすかもしれないから、その時のための保険だつてば』

『あなたの個人的な仕事を頼んだことが?』

『うん。「総帥直々に、しかもプライベートなことを頼まれた」って、自尊心をくすぐるでしょ？　俺は他の幹部より一步どころか、二歩も三歩もリードしてるんだ、って思えるし。そうやって満足してる間は、野心なんか起こさないだろうし』

『……どこの一流ホステスだ』

『で、仮に野心を起こすとしたら、沙龍ちゃんに不満を持ってるであろう人と接触するでしょ？ そのために、わざわざ「そういう人も居るよ」って教えてきたんだってば』

『でも、実際には居ないだろ？』

『ま、今んとこね。多分』

『じゃあ、劉は誰に接触するってんだ？』

『さー？ 仮に「ミスター汪」だと思ひ込んだりするかもね』

『まったく、どこのナンバーワンホステスだ……』

汪はボールペンを放り投げて、両手を広げた。

人探しの件について、汪は上海に戻るまでぶつぶつ言っていたが、沙龍に宥められて終わった。

ただ、彼女の心境は分からなくはない。少なくとも「董天に知られなくなかったから」という言葉は信じた。

それも、董天に対する嫌悪感からではなく、どちらかと言えば「董天が気に入るから」というのが主な理由だった。

「私の祖父を目の前で殺したこともね。董天は仕事だったから、割り切っているはずだとは思うけど……。気にしてはいる。確実に」

「どうしてそう言い切れる？ 俺から見ても、あれは、ボスの命令なら百万人でも眉一つ動かさずに殺す仕事人間だぞ」

「この前言ったでしょ。元々、まともじゃないんだよ。まともな感情は董天にはないんだよ。でも、じゃあ、本当に人間の心のかけらもない妖怪なのかっていうと、それも違うと思うんだ……」

ファーストクラスは椅子が沈みすぎて嫌だというので、ビジネスクラスにしてよかった。

椅子と椅子の離れたファーストクラスでは、こんな、こそこそした小さな声で顔を突き合わせて話すことなどできないし、第一、手も握れない。

汪は、何食わぬ顔で、毛布の下で沙龍の手の甲を撫でていた。しかし、それは、恋人の触り方ではない。話のせいだろうが、子供をいたわる触れ方だ。

「董天に言いたくなかったのは分かった。……でも、だったら、俺一人に言ってくればよかったんだ」

汪は、まだそこにこだわっていた。

自分でも、そろそろこの愚痴はやめなければ、と思っている。

「ヴィツキーに言うってことは、董天に言うってことだもん。それができてないと、むしろ、上海はやばいよ」

「……」

一理ある、と思う。

上海のあのビルに居る人間が、全員味方だから、沙龍はこうして、人数分のお土産を買って帰るのだ。

でなければ、黒猫が失脚した時のように、やがて、沙龍も誰かによって失脚させられるだろう。

「少し眠るよ。昨日、あまり眠れなかった」

「そりゃ悪かったな」

汪は意味深に笑って、今度は、指を絡ませるようにしたが、沙龍はもう寝息をたてていた。

「……おやすみ」

李偃月はすぐには見つからなかったものの、結果的に搜索期間は三月とかからなかった。

それについては、劉の手腕を褒めるしかないのだが、汪たちのトピックスとしては、李偃月が見つかる前の、年明けの春節間近になった頃、上海の蒼龍会の本部にたった一人で乗り込んできた道士の女の方が衝撃だった。

どんな妖術を使ったのかは知らないが、あの屈強なシユウが一撃で昏倒させられていたし、小春は「手加減されて」気絶させられた。偽老板のご老人などは一番最初に眠らされたクチだ。

ちようど居合わせていた汪は、コルト・ガバメントを抜く前に首筋に短い柳葉刀を突きつけられて、人質にされた。一生の不覚である。

董天は、うすうすこの女の正体が分かっているらしく、充分距離を取ってから身構え、

「その型には覚えがあります。李家の方ですか？」

いつもの余裕の表情を消して言った。

汪は頷動脈を人質にとられている上、なにか分からないもので首を絞められているので、声が出せない。後で聞いたが、これは道術の一つだという。

誰の血か分からないが、スーツの見える範囲に赤黒い染みがついていた。いや、自分の血か。そういえば、さつき、どこかを斬られた気がする。

「話が早いね。お前たちが奪った『龍』を返してもらいに来た」

女は、もうこの場に居るのは三人だけだと思っているはずだ。

エレベーターの電源はこの女に落とされたので、誰かが気付いてやって来るにしても、時間がかかる。が、誰かは居るはずだ。この九階に来るまでに全フロアーを制圧したとは思えない。

董天は、少し時間稼ぎをすることにした。

「沙龍様はご健勝でいらつしやいますよ」

「そうだろうな。貴様らが祀り上げてるのは知ってる」

「あの村の生き残りが居るとは思いませんでしたよ。孤軍奮闘でここの場所を調

べ上げたとでも？ さすがですね。いったい、どんな情報網をお持ちやら」

「タネあかしは地獄で泰山府君に聞け」

「ああ、思い出しました。李碧媛^{へきえん}——。仙道などという鬼道に堕ちた崑崙の道

士。貴女ですね、ここ数ヶ月、我々のことを嗅ぎ回っていたのは」

「人を犬みたいに言ってくれるじゃないか。人殺し稼業が」

「フフ、我々は同じ穴のムジナだと思いますがね」

「……」

碧媛に首を抱えられている汪は、不謹慎にも、碧媛の豊満とはいかないまでもそこそこ弾力のある胸の感触に、この女は沙龍の身内だとしても血縁はないだろう、と断じていた。

まったく、こんな死にそんな状況で、考えることはそれだけか、と我ながら思う。

いや、死にそんな状況だからこそ、か。

「沙龍様の身内ならこのままお帰りいただくことも視野に入れていましたが、仙界の人間なら話は別です。本気で行きますよ」

「笑止。遊んでやるのはこちらだ——」

動けない汪をはさんで、ただならぬ殺気が飛び交う。

その時、沙龍が階段の方から音もなく現れたのは、察して足音を消してきたからである。

まさか、騒ぎを起こしているのが自分の身内だとは思わなかったので、

「……碧姐々？」
チエチエ

素っ頓狂な声をあげてしまった。

「沙龍!？」

一瞬だった。

汪は、首の拘束が緩んだのを知って、身を捻り、懐からコルト・ガバメントを抜いて、女道士に向ける。

董天は、袖の下から光るものを手に滑り込ませたが、投げる前に思いとどまった。

李碧媛も、同じく、目の前に飛び込んだものに躊躇して、動きを止めた。

沙龍が、小さな手を両手いっぱい広げて、碧媛をかばったのだ。

「全員、動くな！」

数秒、時間が止まり、張り詰めていた空気はやがて弛緩していった。舞っていた埃がだいぶ落ち着いた頃、沙龍が言った。

「董天、汪、しばらく二人にしてくれないか？」

しかし、董天は動こうとしない。

沙龍はやや強い調子で言い直した。

「ヴィツキーが怪我してる。治療してやって。他にも怪我人が居るでしょ」

しぶしぶ沙龍と碧媛を残して去ったが、董天は、ドアの外で二人の会話を聞くつもりのようにだった。

汪は「やれやれ」という仕草をしながら、倒れているシュウや小春の様子を見に行った。

「ごめんね、碧姐々」

沙龍は第一声、そう言った。

椅子も机もひっくり返った事務所で、とりあえず、パイプ椅子だけでもなおしてそこに座ってもらおうと思ったのだが、碧媛は黙って首を振った。

「拉致された場所で、その色に染まってるなんて、びっくりでしょ。ごめんね」

「いや、それは分かっていたんだ。お前が『蒼龍会』を乗っ取ったんだろう？」

「うん、まあ……」

「それを責めはしない。しかし、ここはお前の居場所じゃない」

「うん……。でも、姐々。もう村はないよ。私たちの帰る場所、なくなっちゃったよ——」

「知ってる。私は見てきたからな。見事に何も残っていなかった」

「……」

しばし、二人で遠い故郷に思いを馳せた。

風景といえば、荒れた黄土と、砂と、岩山しかなく、山裾に降りれば迷路のような枯れ井戸があった。

水源は村の外れにあるオアシスのみで、そこが干上がれば、十キロ先の河まで水を汲みにいかなければならなかったが、そのオアシスが枯れることはなかった。

痩せた土地なのに、作物はよく実り、雨も降る。それら全てが、龍脈と、龍穴と、黄龍のおかげだと村の者たちは言っていた。

沙龍は、文明の利器を排除したその特殊な村で生まれ、育った。

歩き始めた頃から武当拳の修業を始めたことを辛かったとは思わない。

弟の偃月は修練が辛いとよく泣いていたが、大きな石造りの家にはいつも人が居て、にぎやかで、血のつながらない姉たちもたくさん居て、沙龍は楽しかった。

碧媛は少し変わり者で、ふらりと居なくなることがあり、また、ふらりといつの間にか戻ってきている。いつもどこに行っているのか、沙龍も偃月もよく知らなかったが、義母に聞くと「買い物」だの「街で仕事」だのと言われる。

確かに、お土産はいつも変わったものが多く、外の世界を知らない沙龍と偃月は、碧媛からもらう土産物や土産話を楽しみにしていた。

昔から不思議と姿が変わっていないが、要するに若作りなのだろう、と沙龍は思っている。多分、もう、だいたいいい年のはずだ。二十代に見えなくはないが、三十は過ぎているに違いない。

蒼龍会の第三部隊が村にやってきたのは、今から六年前。あの、悪夢の日だ。沙龍の養母も、養父も、みな、殺された。村で最強と言われていた祖父ですら、董天に殺られた。

義姉の碧媛が生きているのは、その時、遠出をされていて村に居なかったからだ。

「生き残ったのは、お前と私だけなのか？」

「分からないんだけど、ユエは生きてると思う。少なくとも、私が気を失う前は生きてた」

「そうか、お前は、ユエ宛てにあのメッセージを残したんだな」

「え？ どこかの印、読んだの？」

「ああ。成都の武侯祠のを見た。それで上海だと分かった」

「そっか、各地に行ったのは無駄じゃなかったね。ユエもどれかを見てくれればいいけど……。碧姐々みたいに殴り込みに来られても困るなあ……」

力無く笑った。

碧媛は自分を連れ出しに来たのである。

これが六年前なら、喜んでついていったらう。

しかし、今、ここを離れるわけはいかないのだ。

その複雑な心境を、この義姉に説明できる自信がなくて、沙龍は途方に暮れているのだった。

「沙龍。『黄龍様』は健在か」

「うん。最近では召喚せずに済んでるけど、共にあるのは分かってる」と、両手で心臓を押さえるようにした。

四肢にみなぎる尋常ならざる力は、常にここから発している、と、自覚している。

「そうだな。お前の『氣』は変わってない」

碧媛は眩しそうに目を細めて、沙龍の頭を撫でた。完全に子ども扱いなのだが、不快には思わなかった。

小さい頃から、この関係も、碧媛の頼もしさも変わらない。

普段そばに居なくせに、いざとなれば悪鬼のごとく守ってくれる。

それは一族の役目というよりも、「家族だから」という単純な理由なのだろう。

う。沙龍にはそれが分かっていた。

「あのね、碧姐々。会えて、すごく嬉しい。今、私はすごく難しい場所と時間の中に居て、さびしいし、どうしていいか分からなかったから……」

「……」

相変わらず、喋るのが下手だな、と碧媛は思った。

十五にもなったのだから、もう少し大人びて、もう少し饒舌になったかと思いきや、沙龍のこの表情は小さい頃とまるで変わっていないではないか。

いや、それは姉にだけ見せる弱さかもしれない。

本当は、ちゃんと六年分成長しているし、大人にもなっているのだろう。

「でも、まだここから逃げるわけにはいかないんだ。まだ、ここでやらなきやいけないことが幾つかあって——」

「……」

碧媛は沙龍の意思を尊重してくれた。

上海から連れ出して、どこかに二人で腰を落ち着けることまで考えていたようだが、「やりたいことがあるなら邪魔はしない」と潔く身を引いた。

しかし、このまま別れるのは各所にわだかまりを残しそうだったので、どうせなら一緒に春節を祝おう、と沙龍は持ちかけた。

KOされた連中は当然腰が引けていたが、意外にも、汪は好意的だった。

仙術に惑わされたか、と皆にからかわれ、しかし、最終的には彼らも碧媛のペースに引きずり込まれていたようだ。

董天はずっと渋い顔をしていたが、最後は、

「李家の人間はみんな脳天気なんですかね」

としみじみ言っていた。

確かに、そういったものはあるかもしれない。

しかし、汪のにらんだ通り、沙龍と碧媛に血縁はない。

つまり、血ではなく、育った環境ということか。

後日、シユウを病院送りにしたことで、汪に怪我をさせたことについて、碧媛は、

「すまん」

と一言だけ謝っていた。

「男らしい姉貴だな……」

汪が、ボソツとそんなことを言っていたのがおかしかった。

そうして、春節のバカ騒ぎに乗じてさんざん飲み食いした後、「そろそろ上海を出る」と言っつて、メールアドレスだけを残し、行ってしまった。

今回「やれやれ」と言っつたのは董天だろう。

「碧姐々は？ これからどうするの？」

浦東空港まで見送りに行った沙龍は、そういえば、国際線の空港に来るのは久しぶりだ、と思った。

こここのところ、国内線の空港は何度か利用したが、浦東空港は鉄太郎を追いかけてきた時以来だ。

「上司が無茶を言うんで、あちこち行かされている。今日は今からデリーだ」

「どんなお仕事なの？」

「んー、今回は物探しかな」

「へえ……。上司って、考古学者かなんか？ 今度、仕事のことも教えてね。お土産はいらさないから、とにかく、気をつけて」

「私のことなら心配するな。どこでも生きていける術は持っている。それよりも、お前の方が心配だ。本当に大丈夫か？」

「うん。大丈夫。味方は何人か作ったつもり」

「そうだな……」

碧媛は、視線を外して、少し遠くを見た。

ガラス戸の向こう、路肩に停めたベンツの前にサングラスをした黒いスーツ姿がある。

「沙龍。『味方』よりも『仲間』を見つけろ。この街には、お前の忠実な部下になる者は居ても、お前の友になる者は居ない」

「うん……」

いつかはこの魔都を出て行かなくてはならない。

それは分かっている。

「ユエが見つかって、決心がついたら、そうするよ」

「ああ、じゃあな」

長身のスラリとした後姿が人混みの向こうに消える。

迷いのないそのまっすぐな姿勢は、幼い日の沙龍が憧れた姿でもあった。

空港まではエアポートバスで来たのに、外に出ると、黒いサングラスに黒スーツの汪の姿があった。

行動を把握されているというのには、あまり気分のいいものではないが、今日ばかりは何故かその極道ファッションにホツとした。

「迎えに来てって言ったっけ？」

腕組した沙龍が言うと、

「いや、免税店のスコッチを買いに来たんだ」

汪は両手を広げて見せる。

「……これでいい？」

さつき売店で買ったガムを差し出した。

とてもアルコールの代わりになるとは思えないが、汪は一つ受け取ると、納得したように助手席のドアを開けた。

8 老師を探して

北京の劉大人から「李偃月を見つけた」という報せがあったのと、上海の街に再び『飛燕』が現れ始めたのが重なった。

劉の報告は、簡潔だ。

『李偃月を重慶にて発見。李沙龍らしき人物を上海で見かけたと匿名で伝達済み』

その後、そこらへんの興信所よりもずっと気の利いた、写真付きの報告書が郵送されてきた。

しかも、その封書は通販会社のダイレクトメールに偽装してある。徐匯区のマンション宛てだった。

沙龍が「上海の連中には知られたくない」と言ったからである。

その報告書によると、偃月は、香港の親戚の家を拠点にして、各地を身一つで旅しているという。

「やっぱり香港か……」

沙龍は、報告書を夢中で読みながら無意識に呟いていた。

ソファでウイスキーを飲んでいた汪が顔をあげたのは、「香港」という言葉が聞こえたからである。

香港には、李家の長女である李慧媛けいえんの結婚相手が居るのだ。

リーチュンチー
李淳馳 という。大学教授をやっていて、専攻は民俗学である。

まだ貧乏な非常勤講師だった頃、とある遺跡の調査中に遭難しかけ、馬で買出しに隣村へ向かう途中の慧媛に助けられたという経緯で結婚した。苗字が同じだったのは偶然である。

沙龍も、李淳馳のことはよく覚えている。少し歳の離れた兄みたいなものである。

偃月は、その淳兄のところにひとまず転がり込んだらしい。そこから、学校に通いつつ、または休学しつつ、中国全土をさ迷い歩いていたようだ。沙龍のことを探していたのだろうか。

「……」

放心したように立ち尽くしていた沙龍は、汪が近付いたのも気付かなかった。肩に息がかかるくらいになって、やっと気付く。

報告書を覗き込む汪は、深刻な顔をした沙龍に構わず、写真の偃月を見て、

「可愛いボーイじゃないか」

などと言っていた。

「そう。私に似てて可愛いヤツなんだ」

「……似てるか？ まあ、この前の男前の姉さんよりは、確実に可愛いな」

「ヴィツキーは兄弟居ないの？」

「あいにく、一人っ子で大事に育てられたクチだ」

「ん……、そんな感じ」

上の空で言っつて、沙龍はもう一度写真を見た。

少し高い位置から望遠で撮ったものだろう。全身像と、顔が大きく写っているものが二枚添付されていた。

十四歳の偃月は今でも泣き虫だろうか。ちゃんと勉強もしているだろうか。

そんな母のような思いがある。

「でかくなっちゃって。道端でスレ違っても気付かないかも……」
写真の中の知らない顔をした少年は、どこか遠くを見ている。

いつも沙龍の後ろについて回っていた小さなユエはもう居ない。それを実感するのは再会した時だろうが、このA4の報告書の中にも沙龍の知るユエは居なかった。

「行くのか？ 香港に」

不意に汪が聞いた言葉に、沙龍はハッと顔を上げた。

「……いや、行かないよ」

「そうか」

「なんでそんなことを？」

「張大哥はあんたに会いたいんじゃないかと思っただけ」

「……行かないよ。私に会いたいなら、張が来ればいい」

「そうだな。それがスジだ」

「……うん」

李偃月は碧媛のように上海に現れることはなかった。

汪や董天には分からない方法で沙龍と連絡を取っていたのかもしれないが、既に蒼龍会としてはそこに関心を持つ必要はなかった。幹部連中の過半数が「李沙龍に造反の意思なし」と判断したからである。

それよりも、当面の問題は『飛燕』だった。

陳志良はインドネシアから動かしていないし、動いた形跡もない。

いったい、誰が『飛燕』の指揮を取っているのか。

数ヶ月前に彼らが暴れていた時も、指示を出していたのは陳志良ではなかったのか。

「分からん……」

今度は、パソコンに入っていたシュウからの報告を見て、沙龍は唸った。

「陳でも、張でもないとしたら、誰なんだ……。蒼龍会に喧嘩を売ってる大馬鹿野郎は……」

沙龍は冷蔵庫まで行って缶ジュースを取り出すと、それを持ったまま開けもせず、ウロウロし始めた。

リビングを早足で行ったり来たりするのだが、汪はソファでそれを眺めるばかり

りである。

さつき沙龍が読んでいたメールの内容も大体推測ができるし、何が分からないのかも分かっているつもりだが、口出すつもりはなかった。汪とて分からないのだ。

「馬鹿野郎が……馬鹿に……馬鹿する……」

「……」

しばらく興味深く観察していたが、そのうち飽きたので、ソファに寝転がって雑誌を読むことにした。

が、汪は飽きてても、沙龍は飽きておらず、そのまま一時間くらいウロウロしていた。

「いや、そうじゃない、そうじゃなくて……」

「おい……」

さすがに見かねて、汪は声をかけた。
ついでに、沙龍の足も止めた。

「ちよっと休憩だ」

「う……………」

「その……、居ないのか？ 天才の友達とか、非凡な知り合いとか、ちよつと発想が変わったヤツとか。一人で考えて答えの出ない時は、そういうのを頼るものだ」

「学校も行ってない私に何を……」

言葉を切って、沙龍は汗をじつと見つめた。

「なんだ？ どうした？」

「発想……」

しかし、沙龍はそのまま、幽霊のようにスーツと風呂場に行ってしまった。

不安になったので見に行ったが、とりあえず、五感は働いているようだった。

お湯をためているのだが、そのお湯を食い入るようになっている。

「どうしたんだ？ 大丈夫か？」

「いや、発想の転換をするには風呂がいいって、さつきヴィツキーも読んでた雑誌に書いてあったから……」

「……。まあ、のぼせないようにな」

それから、心配だったのでドアは開けっ放しにさせておいたのだが、五分もしないうちに沙龍が大声で叫んだので、汪は慌てて見に行った。

「居た——ッ!!」

「なんだ! なにが出たっ!？」

てつきり、黒光りするヤツでも出たのかと思ったが、全裸で立ち上がった沙龍は、やおら汪のYシャツを掴んで、こう言ったのだ。

「居た! 居たよ、変人の知り合い! ヴイツキー、今度こそ人探しをお願いする!」

「人探し……? いや、まあ、それはいいから、とにかく、出るか、入るか、どちらかにしろ。体が冷えるだろ」

「う、うん」

沙龍は再びバスタブに浸かって、汪にメモ帳を取ってこさせると、自分の知っていることをまくし立てた。「とにかく、変なじーさんなの」と沙龍が説明するその人物については、本名も住所も分からないという。

「通称『ラオシー老師』。知ってる呼び名はそれだけ。歳は七十は超えてる感じで、一

見、すごく貧相に見えるんだけど、よくよく見ると、実は、体格も悪くはなくて……。なんか、圧倒されるんだよね。そのギャップがまた不思議なの。普段は木賃宿に泊まっていて、ほぼ毎日、裏通りで麻雀してる」

「麻雀？　もしかして……」

汪が、すぐにピンときたのか、顔をしかめる。

そこは軽く流した。

「うん。鉄さんの師匠みたいな人でね、麻雀の腕だけは神業級にすごかった。博打打ちの間ではひそかに有名人なんだ。多分、まだ上海の下町に居ると思う。

数ヶ月単位で河岸を変えるから、今、どこに居るかは分からないんだけど……。麻雀の稼ぎを全部アルコールにつぎこんじゃう人。でもアル中には見えなかったな。お酒大好き、博打大好き、なじーさん」

「確かに、聞いてるだけで『変人』だな」

そう。

老師はただの変な爺さんなのである。

しかし、沙龍は、自分でも原因の分からぬ妙な高揚を覚えていた。

老師に再会できたら何かが変わるかもしれない、とさえ思っている。

「鉄さんが居た頃は、私も老師によく麻雀を教えてもらっていたんだ。遊び半分だけどね。似顔絵は……、私は描けないけど、プロを呼んでくれれば作れると思う」

「そんだけ特徴があれば、充分だろう。三日で探しだしてやる」

「吹いたね。一週間くらいかかってもいいよ」

「中国全土、三ヶ月もかからず李偃月を見つけ出した劉の手前、上海で一人探すのに、そんなに時間かけてられるか」

「なんだろう、この妙な対抗意識は、と沙龍は思った。

「が、それが可愛く思えるほど、沙龍も大人にはなりきれていない。

「うん、じゃあ、お願いね」

「そう言って、晴れやかな顔でバスタブのへりにあごを乗せ、汪の顔をまじまじと見つめた。

「汪の方は、もうこの視線には慣れたが、棒切れのような身体にはいまだに慣れない。」

自分はそんなモラリストだっただろうか、と苦笑気味に思うのだった。

三日で見つけると言ったのに、沙龍が老師に直面するまで四日かかったことについて、汪は特に弁解しなかった。

沙龍が外出の準備に手間取って、日付をまたいでしまっただけの話なのだ。実際には、最初の二十四時間以内に見つけていた。

ただ、その時点で、老師が器物損壊（公園のベンチで寝ていたら足が折れたらしい）の容疑で上海市警の留置所に入っていたので、それを釈放させるのに手間取ってしまったのだ。

金の力もコネの力も最大限に使ったが、そのせいで、知り合いの署長には「あの浮浪者が会の金でも持ち逃げしたのかね」と変に勘繰られてしまった。しかし、もしそうだとしても署長は何も言わないだろう。

留置所の住人が、死体になって戻ってきたところで、警察の手間は変わらないからだ。

それよりも、いつもなら服にも髪にも無頓着な沙龍が、今日に限って盛大に飾りつけた理由が、汪には分からない。

もう午後十一時を過ぎていて、時間外労働だとホテル側には言われたが、無理を言つてメイを寄越してもらい、綺麗に髪を結い上げてもらった。

代金は通常の二倍払ったが、メイは強張った笑顔で礼を言うだけで、汪を見ようともしない。うすうす気付いているのだろう。

もし、メイがホテル側に今後スイートの客は遠慮させて欲しいと言い出すとしたら、それまでの縁だと思ふしかない。

そして、いざ、老師の居る木賃宿に乗り込むと、この掃き溜めでは、沙龍の鮮やかなチャイナドレスは映えすぎた。

場違いにも思える。

そんなにめかしこんで会わなければならないような人物なのだろうか？

この小汚い格好をした老人が？

汪はいつでもコルト・ガバメントを抜けるようにして、宿の板戸の前に立っている。

廊下には誰も居ないが、この安宿に泊まっている者たちは、みな、息をひそめて部屋にこもっているに違いない。

黒塗りのリムジンがやってきて、そこから降りてきた金持ち風の少女とそのボディガードみたいな二人が、界隈の有名人『老師』を訪ねているのだ。しかも、こんな深夜に。騒動に巻き込まれたらたまったものではない。

「人を訪ねる時間じゃないぞい。人を訪ねる格好ではあるようだが」
裸電球の薄い灯りの下で、お互いの姿はかるうじて見える、という具合だろうか。

汪は開けたドアの手前から動かなかったが、沙龍はかまわず、その汚い板張りの部屋に入ってしまった。

「私だって、老師が明日の朝一番の列車の切符を買ったって情報がなければ、こんな時間には来ないよ」

「沙龍か」

老師は大して驚きもせず、

「おぬし、鉄の字が居なくなっただけからはとんと顔を見せなくなったのう」

ヒヒツと笑った。

「そりや、私はもともと鉄さんに会いに来てたんだから、干からびたじーさんに会いに来る道理はないね」

沙龍も負けていない。

そういう軽口を叩ける仲ではあるようだ。

部屋には、小さな木の机と、今にも壊れそうな椅子が二脚あるだけで、あとは漆喰の壁に沿うように寢床が置いてあった。

老師は、沙龍を椅子に座らせると、「茶はないぞ」と言っつて、酒瓶を引き寄せ、手酌で飲み始める。

「老師、どこに行くつもりなの？ 上海にはもう戻ってこない？」

沙龍が聞いても、のらりくらりだった。

「いや、アテがあるわけではないんじやが。そろそろ、四川の酒が飲みたくなつたからもう」

「もう少し出発を延ばしてもらおうことはできない？」

「なんぞトラブルか？ わしは麻雀打つて、酒飲むしかできんぞ」

「ん……。ちよつと考えあぐねていることがあつて、相談に乗って欲しい」
「なんと。相談じゃと？ 恋愛相談なら、百戦錬磨のわしに任せておけ！」
「ちげーよ、ジジイ。レンアイなら日々順調だ。モテモテで困ってるくらいで、相談すべきことなど何もない」

汪はふきだしそうになったが、こらえた。こういうのには慣れている。

「鉄の字には見向きもされなかつたくせにのーう」

沙龍が、明らかにムツとした顔を見せた。

珍しい。

いつもはこんなに表情には出ないのに、と汪は思った。

「ふざける。今だったら一日で落としてみせる。あの頃は胸も尻もなかつたから、相手にされなかつただけだ！」

「いや、今だってないじやろうが、どう見ても」

と、老師は、沙龍の上から下を交互に見渡す。

「……」

サングラスの下で同意している男が居るのを、沙龍は気付いていない。

だ。

「じゃあ、私は日本に行こうかな。鉄さんに会いに……」

呟くように言った沙龍の言葉は、それこそ空しいだけのものだった。

沙龍は幼い日の終わった恋を引きずっているわけではない。その恋を成就させたところで、やはり空しさしか残らないことを、沙龍も知っている。

十五歳の沙龍を、どっぷりはまった闇から救うものがあるとしたら、それは恋ではないのだ。

汪も、それは分かっていた。

まして、体だけのつながりが何になるというのだろう。

「……小姐」

思わず、汪は声を掛けてしまった。

沙龍が辛そうに見えたからだ。

しかし、視線を上げた沙龍はいつもの顔に戻っている。汪に頷いてみせると、

「老師、上海は今、幸か不幸か私の街なんだ」

老人に向き直った。

「フム。それは自覚しておるのか」

「本当は逃げ出したいと思ってる。こんなシルクのチャイナドレスも、贅沢な暮らしても、私が本当に欲しいものじゃないからね」

「……」

「でも、逃げないよ。私は負けないから。逃げる必要がない」

「……」

「なのに、どうしても私と喧嘩したいヤツが居るらしくて、そいつをどうにかしないと、私はどこにも行けないんだ。老師、力を貸してくれ」

「……。酒が切れたのーう」

沙龍がブチッと切れたのが分かった。

やはり、この老人はただものではない。

これだけ沙龍を怒らせて平気な人間を汪は初めて見た。

結果だけを見れば、老師はたいしたことをしたわけではない。

いつものように、路地裏で麻雀をして、沙龍に指針を与えたに過ぎなかった。しかし、後から考えれば、やはり、この老人は、この時期、上海に居なければならなかったのだらう。

沙龍が訪ねてきたあの晩、老師は杭州行き切符を破って、代わりに美味しい酒を買ってこさせると、しばらくはここに居るからまた来い、とだけ言った。

そして、次の日から、恐らくは老師にとってのごく普通の日常が再開し、沙龍は、以前よりはやや本格的に麻雀を教わることになった。

裏通りで雀卓を広げれば、面子などすぐ集まる。みな、わずかな所持金をどうにかして増やしたい者たちばかりだ。

老師と沙龍は、色んな若者や年寄り卓を囲んで、下町に馴染んでいた。

沙龍が勝つことも、通りすがりの自称雀鬼が勝つこともあったが、最終的な勝

ちはいつも老師に持っていかれた。

不思議だった。なぜいつもしてやられるのか。

沙龍から見れば一流のギャンブラーだった鉄太郎も、老師相手にはほとんど勝てなかったのだから、やはり、その強さには何か秘密があるのだろう。

金払いの心配もない沙龍は、自分が麻雀に強くなることにはほとんど興味がないので、老師の強さの秘密を知るほうに引かれた。

だから、勝ちにいくよりも、老師の打ち方を観察し、研究していたのだ。

そうやって出した沙龍の結論は、実は鉄太郎がたどり着いた結論とほぼ同じで、老師は壁牌（牌山）の一つ一つを全て把握しているとしか思えない、ということだった。

（いくらなんでもまさか……）

と思うのだが、もうそれしか考えられなかった。

しかし、だとしたら、老師にとって、麻雀はとてつまらない博打ではないか、と思うのだ。いや、博打ですらない。誰がどんな手で、これから何を引くのか分かっていいるのだ。そんな神の視点でゲームをして何が楽しいのだろう、と思

う。

（仮に、ものすごく動体視力がよくて、記憶力がずば抜けていて、壁牌を見通せることが可能だとして、青空麻雀では無敵だとしても、全自動の卓ではそれじゃ勝てないわけだし……）

沙龍は行き詰まって考えるのをやめた。

イカサマではないと思う。

老師は無欲で、イカサマしてまで勝たなければならぬ理由がないのだ。

本人は酒代さえあればいいらしく、稼いだ金も、大負けして絶望し、今にも自殺しそうな対戦相手に返す時もあった。

今も、老師から半分ほど掛け金を返してもらった若者が泣きそうになって何度も頭をさげていった。

「母親への仕送りを麻雀の掛け金にするようなバカ者は呪われて地獄に落ちろ」

沙龍が呟いたら、見物していた常連の中年男が笑って言った。

「老師のお孫さんは容赦ないねえ」

常に一緒に居るので、勝手に孫だと勘違いしている。

いちいち訂正するのも面倒なのでそのままにしているのだが、沙龍も人前ではわざと爺々イエイエ（※おじいちゃんの意）と呼んでいた。

「爺々、お腹空いたよ。お昼食べにいこう」

そう言っつて、近場の食堂に行くのが日課になっていた。ここ一ヶ月ほど、そんな生活を続けている。

平日の家庭教師の時間は夜にずらしてもらっていた。

大盛りの炒飯と餃子を出してもらって、沙龍ががつつく合間も、老師は昼間から紹興酒をちびちび飲み、ザーサイをつまんでいる。

いつものことながら、沙龍があまりにも欠食児童のように食べるので、老師が呆れたように言った。

「おぬしの食べ方見てると、もう一人の孫を思い出すのーう」

「え、本当に孫がいるんだ？」

「んー、まあ、息子というか、孫というか」

「あ、若いおねーちゃんに産ませちゃったんで、息子っていうのは恥ずかしいから孫ということにしてるだけ、とか、そういう話ね」

「いや、全然違うぞい。血はつながつとらんのだじや。しかし、オムツ変えて、ミルク飲ませて、わしが育てたから、まあ、息子じやのう」

「フーン……。お嫁さんは？ 居なかつたの？」

「あの頃は、もう、女には飽きてた時期じやな。おぬしも知つとるじやろうが」

「ちよつと、老師……。まだボケないでよ。老師が子育てしてる頃、私はまだ生まれてないよ」

「ヒョツヒョツヒョ、そうじやつたかのう」

「でもさー、息子さんが居るなら、心配してんじやないの？ 上海に居るってことはちゃんと知ってるの？」

「いや、知らせてはいないな」

「育ての親がこんな生活してるって知ったら、嘆くよ、きっと」

「いや、それもないな」

「でも、近況くらいは知らせてあげなよ。私だったら、心配で、大陸中探しちゃうよ」

「フフ、おぬしはなんだかんだ優しいのう」

「……」

そう言われてひどく照れくさかった。

この老人は、自分がどれだけの命を奪ってきたか、知らないからそんな風に言えるだけではないか、とも思う。

「フウ、ごちそうさま」

山のような炒飯がやっとなくなって、顔見知りの店員が皿をさげにきた。

「小姐、毎回完食してくれるのは嬉しいけど、一人でそんなに食べたら太るよ」
遠慮なく、そんなことも言うてくる。

「その分、動くから、大丈夫」

そう言ったが、店員が去ってから、

「……というか、多分、体質なただけどね」

と、ひとりごちた。

どんなに食べても太らないし、すぐお腹がすくこの体は、董天が言うように、魂魄に刻まれている『黄龍』に栄養を持っていかれるせいなのだろう。

沙龍は生まれた時からその状態なので、特に不思議に思ったことはなかった

が、他の人間の食欲や食べる量を見ていると、自分が特別なのだということとは物心がつく頃には理解した。

「わしも、いくらでも酒が飲める臓腑を持ちたかつたわい」

老師がヒヒツと笑いながら言っていた。

「食費がかさむだけなのに」

「それが辛いか？」

「……？ いや、そんな風に思ったことはないよ」

「そうか」

「うん」

いつもなら、食事が終わったら昼寝をすると行って、さっさと宿に戻ってしま
うのだが、今日は老師の腰が重い。

沙龍は老人の戯言に付き合うことにした。

「人は色んな天賦の才や業を持って生まれてくる。見目のよい容姿であったり、
優秀な頭脳であったり、早死にする運命であったり……。のう、沙龍。それは神
の采配なのかのう？ いや、そうではあるまいよ。そんなものは配牌みたいなも

のじゃ。悪い牌が来る時も、良い牌が来る時もある。両方いつぺんにくる場合もあるうて。それは神さえも抗あらがえぬものじゃ」

なにやら壮大なことを言い出す。

沙龍はだいぶ冷やややかな目で、出がらしのお茶を飲んだ。

「うん……。それで？」

「つまりじゃな、おぬしの胸も尻もないのは、たまたまそうなたただけで、誰のせいでもないということなのじゃ」

「だから、別に嘆いてないってのに！」

「それとな」

「うん？」

「ちと考えてみたんじゃが、この前、おぬしが言っていた話で、もし、今、おぬしの周囲で不可解なことが起こっていて、敵の姿を探しているのを見つからないというなら、敵など最初から居ないのではないか？」

「……最初から、居ない？ でも……」

「まあ、多分、そろそろ来るじやろう」

「『来る』？　なにが？」

「ウム……。雨がきそうじゃ」

「雨……。？　晴れてるけど？」

沙龍がガラス窓の向こうを覗くように見上げると、晴天だった空が一分後にはみるみる曇っていき、粒の大きな雨が降り出した。

予言したわけでもないのだろうが、こういう不思議なところが、老人が周囲から『老師』（※先生の意）と揶揄されつつ尊敬されている所以でもあった。

そして、老師の雀卓に思わぬ人物が現れたのは翌日のことだった。

春の陽気に包まれた上海は、そろそろマフラーもコートも要らない季節になっていた。沙龍の目の端に映ったそのトレンチコートはただ暑苦しかった。

（ん？　トレンチ？）

普段、老師の雀卓にいたり、または傍らに立って冷やかしている連中は、その日暮らしの、薄汚れたTシャツを着たような男ばかりである。スーツ族など誰

も居ない。

そこに、バーバリーのトレンチコートはとても目立つ。

場面はちょうど一局終わって、大負けした若者が見るも無残に肩を落としているところである。

「俺が代わってやるよ、兄さん」

トレンチコートの男が、よく響く声で言った。

沙龍の対面である。

男は沙龍に眉毛をあげて笑ってみせた。

サングラスをしていたが、見間違うことはない。

「張大哥……」

それは、呼びかけではなく、ただの呟きだった。

「元気そうだな。だいぶ美人になった」

「……」

沙龍は息を呑んだ。

六年前、この男は確かに唯一の味方だった。

蒼龍会で飼い殺しにされる予定だった自分を、外に連れ出してくれたのも、制限付きの自由をくれたのも、そして、生きる希望を与えてくれたのも、この男だ。

しかし、今、目の前に居るのは、本当にお菓子を買ってくれたあの張大哥だろうか。

老師はどこ吹く風で、大負けした若者になにやら聞いている。

「この色男が代わりに打つと言ってるが、どうするかね？」

既に椅子を明け渡しているのに、どうするもこうするもない。

「はあ、お願いしますよ。どうせ、これ以上、払えませんし……」

今日は一局清算でやっている。

若者は有り金全部を卓に置いて去ろうとしたのだが、それを張が引き止めた。

「まあ、待てよ、若い。この金はとりあえずしまっておけ。……それで、だ。

俺が今の金額分、マイナスの状態を始めよう。それでいいかい？」

その言い方と、芝居がかった手ぶりと、座った姿勢とで、張はこの場を一気に支配してしまった。

「お前さんがいいなら、わしは構わんが。自信満々じゃな」
老師がヒヒツと笑う。

「あの……」

札束を押し付けられた若者は、戸惑っているようだ。

「心配しなさんな。それに加えて、俺の儲けは全部お前さんにやるよ」
張が煙草をくわえて笑った。

「沙龍と、そっちの旦那はどうだい？」

「無問題」

沙龍が短く言い、西家に座っている中年も頷いた。老師の取り巻きの一人で、文字通り「髪結いの亭主」をやっている男だ。

張が煙草をくわえたまま火をつけないので、亭主は、自分の持つてるライターでつけてやった。

「酔狂じゃのう。お前さんの取り分はなしでいいのか？」
老師が聞いた。

「目的は、カネじゃないんでね」

「ホ……。金欲にまみれた男がそれを言うか」

「ひでーな、爺さん。そんな極道に見えるかい？」

「どころか、どこかの親分さんに見えるな」

張は片眉だけを上げ、おどけた表情をしてみせたが、目は笑っていなかった。

「張大哥はなぜここに？」

一番に聞くべきことを聞き忘れていたので、配牌が終わり、本格的に打ち始めた頃に沙龍が聞いた。

その声はやや硬い。

「上海の路地裏に仙人みたいな爺さんが居るってんで会いにきた」

「香港の人ってみんなそうなの？ 大事なことを聞いても、全然、違うことを答える」

「すまん、シャイな野郎が多くてな」

「フン……」

卓上の勝負は、というと、ほとんど老師と張の一騎打ちみたいなものだった。

沙龍も、髪結いの亭主も、半分口を開けてその異様な戦いぶりを見守るしかな

かった。

が、最後の最後になって、老師は手を抜いた。それが、沙龍には分かった。恐らく、張も気付いたはずだ。

それに気付かなかった者だけが、張の大勝に喝采を送った。

「旦那、強いねえ！」

「言うだけあるよ！」

張は、勿論、素直に喜んではいなかったが、そんなそぶりは見せずに、クールに応えていた。

「まあ、そんだけ俺にツキがあつたつてことだ」

「……」

張り詰めた空気が流れてくる。

沙龍は注意深く老師と張の様子を見ていたが、今、自分が感じているこの緊張感はどこかまったく別のところからきているような気もした。

「お前さんは、虎じゃな」

足元の酒瓶を取り出して、一杯あおった老師が張に言った。

「虎……?」

「さよう、龍のような御伽噺の存在ではなく、まぎれもなく現実の生き物じゃ。大きな足で大地を踏みしめ、敵対者には牙を向く、とても強い存在——。そんな男に、龍などというファンタジーは必要ないじやろう」

張はハハッと笑った。

「買いかぶりすぎだぜ、爺さん。俺はただの怠け者の快樂主義者でね」
「上海には何をしに来た？」

さきほど、沙龍も聞いた質問だ。

張は、しばらく間を取るように、煙草をくわえると、

「龍の様子を見に」

そう答えた。

「見るだけか？」

「さあ……」

と、あやふやに笑って、話題を変える。

「ところで、爺さん、どうして俺を『勝たせた』？」

「フム……。勝負したかったのか？」

「いや。あんたの神業つてのを見てみたかった。こう見えて、信心深い性質たちなん
でね。爺さんが麻雀の神様に愛されてるなら、その技を生きてるうちに拝んでお
きたかったのさ」

「わしはただの爺じゃよ」

「どうだか」

「……」

張は、火をつけてくれる部下が居ないのに気付いて、ライターを出そうとし
た。

が、内ポケットに伸ばした手は、そうは見えなかったのだろう。

ひどく近くで銃声がして、

「動くな、張！」

張り上げた声とともに、北家に座っていた張の左右から、今までどこに居たの
か、汪と董天がそれぞれ現れて、銃を向けた。

シンメトリーのように、二人の動きはシンクロしていた。あつという間のでき

ごとだ。

張はゆっくり両手を挙げたが、表情は明らかに納得していなかった。

数人の観客たちは頭を抱えて路地にうずくまっております、数人は腰を抜かしたまま逃げた。

髪結いの亭主も、椅子から転がり落ち、這うようにして逃げていった。

老師は「騒々しいのう」という顔をして、酒を飲み続けている。

「……」

沙龍は今までのところ、何もしていない。

が、沙龍が足を組んで視線を横に向けると、冷やかし客の中に紛れていたシユウが前に出てきて、「失礼します」と言いながら張の懐に手を入れ、そこにあつたオートマチックの銃を取り上げていた。

「」

沙龍が叱るように何か言った。

モンゴル語のようだ。

「真抱歉」

シュウは中国語で謝り、張のもう片方の懐から、もう一丁の銃も抜いた。これで、張は丸腰である。

董天と汪は、それぞれ、張から一メートルも離れていないところで銃をピタリと構えて動かない。

「おいおい、俺のかわいい部下たちは殺してないだろうな？」

「心配ご無用。全員寝ているだけです」

董天が答えた。

小雪や、他のスタッフたちがやったのだろう。

何人引き連れてきたのかは知らないが、多くてもせいぜい二、三人だろう、と沙龍は思っていた。戦争をする気なら、もっと大所帯で来るはずだ。

「……で？　これは、どういうことだ？　弟みたいなヴィツキーと、長年仲良くしてきた同僚に銃を向けられるなんて、想定外なんだが」

「張大哥、その名を呼んでいいのは今のところ老板だけです」
汪がよそ行きの声で言った。

「……そりゃ失礼」

「張」

ふざけるのは終わりだという口調で沙龍が呼びかける。

「私が飛燕の黒幕に気付きながら放置していたのは、昔、助けてくれた人を信じ
たかったから、じゃない。この件には、私が一人で考えても絶対分らないよう
な、とんでもないカラクリがあるんじゃないかと疑ってたからだ」

「ホウ……？」

「そう。『信じたかった』じゃない。私は今でも信じてる。香港の張大哥は、ナ
ンバー1になどなりたがってないし、上海を食い物にするはずはないって」

「……」

「でも、どう考えても、証拠をつなぎ合わせても、飛燕というやんちゃ坊主たち
を操れるのは張しか居ない。……難問だったよ、私には」

「……それで？」

「私は最初から『どこかに隠れた敵が居る』と思い込んでいた。でも、老師が
言っていたよ。敵の姿を探しているのに見つかからない時は、敵など最初から居な
い場合もある、と」

「……いや、あれは適当に言ったんじゃがのう」

老師の独り言は無視して、沙龍は続けた。

「で、早々にタネあかしして申し訳ないんだが、張大哥。実は、この二人の銃に弾は入っていない。私が抜いておけ、と言ったんだ。だから、銃を向けたことを根に持たないでやって欲しい」

「はあ……!?!」

沙龍は董天が構えているベレッタを取り上げて、弾倉部分を見せた。

「ほらね」

「……。なんだよ、ドツキリかよ。じゃあ、ライター出して、煙草の火をつけてもいいか？」

張は姿勢を崩して、内ポケットに手を入れる。

「いいよ。でもね——」

沙龍は、今度は汪の構えているコルトを取り上げ、

「こっちは弾入ってるからね。気をつけて——」

それを一発、地面に向けて撃った。

パンツ

と嫌な音がして、コンクリートに弾丸が突き刺さる。

「ほらね？」

そして、沙龍の手には少々あまる大きなコルト・ガバメントは、次に張ではなく、董天に向けられた。

「……!？」

張も、董天も、驚いている。

「ヴィツキーには、弾を抜いておけ、と言った後、もう一度、入れておけ、と言った。悪いな、董天」

「どういう茶番なんです……？」

「茶番を行っていたのはお前たちだろう。『飛燕』は、香港の張大哥が、上海の董天大人と共謀して、蒼龍会の版図を広げるために行った狂言だ。……違うか？」

「……」

「……」

渦中の二人は、沙龍の禍々しい笑顔の前にしばらく沈黙していた。

すぐそばで行われている緊迫したやりとりとは全く関係ない風に、老師は白酒と呼ばれる高級酒をちびちびやっている。使い古した小汚い瓶に入っている、中身は極上酒だ。

「そうそう、さっきの話じゃがのう。お前さん、どうして勝たせたのか、と聞いたな」

「……ああ、ぜひ聞きたいね」

張は落ち着いて言った。

こんな修羅場には慣れてきているのだろう。

もう、張に向けられている銃口はなかったが、実は二メートル先に彼の銃を二丁持ったシュウが居る。

実質、拘束されているのと変わらなかった。

「力を持った者には花を持たせるのが、この国の民が数千年かけて得た知恵だか

らじや。どうか、天子さま、見逃してください。わしらは力なき僕です、とな」

「……。つまり、あんたは、余裕こいて、俺をおだて上げてくれたってわけか」

「それに気付かない振りをするのが、君主の度量じゃよ」

「なるほど、勉強になったぜ、『老師』」

「……」

沙龍はしばらく董天にコルトを向けていたが、急にトリガーを基点にクルツと半回転させ、その重い金属を汪に返した。

張が喋る気になったようなので、董天を拘束する必要もなくなったからだ。

「まったく大した老板だ。俺が見込んだだけある」

張はやっと煙草に火をつけて、ゆったり足を組んだ。

フーツと紫煙を吐く。

それが虚勢ではないことはこの場のメンバーには分かる。

「さて、それじゃ、仲間割れはここまですべて。あんたが『飛燕』のことをどこまで知っているのか、教えてくれないか。沙龍」

「全部？」

「そう、全部だ」

「『飛燕』は、『香港の張大哥』が、CIAに裏切られ、見放されたクン・サー（※東南アジアの麻薬王）に恩を売って、東南アジア進出の足がかりを作ろうと、タイの華僑の落ちこぼれを寄せ集めて作った、使い捨ての特攻部隊だ。『飛燕』が上海で稼いだ金は、綺麗に洗われてクン・サーの懐にそのまま入っていたんだろう」

ヒューツとわざと下劣に口笛を吹いて、張が賞賛した。

「エクセレント。なら、その最終的な目的も分かるな？」

「あの黄金地帯を蒼龍会がそっくり乗っ取るため」

「パーフェクト……！　と言いたいところだが、さすがに最後のピースは嵌められなかったか。説明してやれよ、董天。お前はいつだって、言葉が足りない」

「最後のピース？」

沙龍が怪訝な顔をして見ると、董天が小さくため息をついた。

「つまり、味方を欺くわけですから、沙龍様が不信感を抱くのではないかと、我々は心配したんですよ」

「我々、というか、お前一人がな」

張が口を挟んだ。

「それで、ゴールドデン・トライアングルに色気を出すのはもう少し待ってくれるよう、張大哥にはお願いしたんです。せめて沙龍様が成人するまで。まあ、無駄でしたけど」

「クン・サーも、もう歳だ。あちこちの集団・組織がヤツがくたばるのを手ぐすねひいて待っている。しかし、死んでから動くんじや遅いからな。手を打つのは早いに越したことはない。……そこで、俺はこの過保護な保護者を宥めるために賭けをすることにした。小姐がこのカラクリに気付くほど頭が回るなら、老板としては申し分ない。董天の言う通り、三角地帯への進出も、一旦、考えなおそう。しかし、気付かないほど呑気なのも問題だ。その時は、蒼龍会の籠から出してやって、どこかいどころの養子にでもなつて、普通に学校に通つたらいい、と言つたのさ。もともと、沙龍がこんなマセガキになつちまつたのは、黒猫がみつともねえ欲を出したせいだからな」

「それで、どっちがどっちに賭けたの？」

「俺が『気付かない方』、董天が『気付く方』だな」

「じゃあ、董天の勝ち？」

「そういうことになるな。もつとも、俺は端から勝っても負けても、どっちでもよかったが」

「……」

沙龍は、しばし目を閉じて、過多気味の情報を整理した。

自分は張の壮大な計画の「ついでに」試されて、賭けの対象にされていたのだ。

そのことに対して腹立たしい思いがまずある。

そして、やり切れないのはユンのことだ。汪だって、部下を二人失った。そのことに、全く遺恨を残すな、というのも無理な話である。

「老板が怒って銃を乱射する、という可能性については？」

沙龍の声はまだ硬いままだ。

シユウは、沙龍の合図一つで確実に張を殺すだろう。場合によっては、董天も、である。

「言いましたよ。味方の死人の数によつては、張大哥も私も殺されますよ、つて」

董天がシレッと言った。

それは冗談ではなく、銃などなくとも、沙龍は人も物も壊すことができるのだ。この小さな老板には、黄龍召喚という必殺技がある。

董天も、張も、二年前の惨事を目の当たりにしているので、その怖さは充分承知しているつもりだった。五十五階建てのビルが倒壊したあの日から。

「なのに、敢えて賭けを続けたのは何故なの？」

沙龍は、張だけに聞いた。

董天は同罪だが、主犯ではないと判断したのだ。

「お前さんは俺を殺さないと思った。今日来たのだから、上海があまりに動かないから様子を見に来ただけだ」

張は芝居がかった手つきでサングラスを取った。

仕草はいつものように鷹揚だったが、張の切れ長の瞳は、沙龍にも分かるくらいに真剣だった。

「うん、それは、知ってる」

沙龍はシュウに頷いて見せると、浅黒い肌をしたボディガードは張の前に二丁の銃を置いた。

「やれやれ、上海の連中は厳しいね」

いつもの笑い方で眉毛をあげる。

やっと、張り詰めていた空気が元に戻った。

董天も、どこに隠し持っていたのか、新しい弾倉をベレッタに入れなおしていた。普段はあまり銃に頼っていないのだが、それでも丸腰なのは嫌らしい。

蒼龍会の面子で常に丸腰なのは沙龍くらいのものである。小雪だって、しっかりと武装している。

短くなった煙草を潰し、もう一本、新しいのをくわえた張に、汪が火をつけてやった。

「お前も、元気そうだな」

「まさか。子守りの日々で、やつれてますよ」

「そうかい」

フフツと笑う張が、思い出したように言った。

「ところで、沙龍。何故、『飛燕』のメンバーが華僑だと分かった？」

「一度、ヴィツキーについていって『飛燕』のヤサに乗り込んだことがある。

そこの若者が少し変わった広東語を喋ってた」

それを聞いて、張は「ホウ」と言った。

「訛りがあったか。お前さん、言語学者にもなれそうだな」

「そんなものになりたくはないね。学者は薄給だってよ」

「じゃ、なにになりたいんだ？」

親戚の伯父さんのような顔でにこやかに聞いてくる張は、そのためなら何でもしてやるぞ、という勢いだ。

「さあねえ……。なりたくないものはないけど、欲しいものならあるかな……」

「なんだい。買えるもんなら、なんでも買ってやるぜ」

「いや、お金では買えないね」

「フム……。愛、か。それは、俺も欲しい」

沙龍が声に出して笑った。

「張大哥は、お嫁さんもらいなよー。今はいいけど、そのうちお腹も出てきて結婚できなくなるよ」

「バツカ、俺はちやんとメタボ検診も受けてるし！」

「……」

幽霊になって二人の話聞いていた汪は、沙龍の欲しいものを自分は知っている気がした。

それからしばらくして、老師は上海から姿を消した。

行き先は四川か山東か、もしかしたら国外かもしれないが、新しい酒を飲みに行ったのは確かだろう。

沙龍の毎日それほど変わってはおらず、ただ、蒼龍会を自分なりに住みよい組織にするのに二年かかってしまった。

そうして、十七歳になった頃のことである。

「そういえば、董天。前に、四神の力を持った人物を探したほうがいいって話を

してなかったか？」

董天は、なぜ沙龍が急にそんなことを言い出したのか、分かっているつもりだった。

(要するに、飽きたんだな……)

どこに行くにも黒服がついてまわり、日常生活には大して役に立つとも思えないような知識を詰め込まれ、まだ十代なのに労働しなければならぬ毎日が、いい加減いやになったのだろう。

「それに、四年くらいずっと聞きそびれていたんだが、以前、私が黄龍を暴走させた時、お前、妙な力を使ってたよな？ あれは仙術か？ 妖術か？マジックか？」

「……沙龍様。わたくし、貴女にお仕えしてそろそろ八年になりますので、あなたのその天然ボケを装った性格の悪い会話術にも慣れましたけど、八年前は生意気ながらもうちよつと素直だった気がするんですよ。性質たちの悪い香港人たちの影響を受けて、まー、こんなにシニカルになっちゃって」

なぜだろう。今日は董天がやけに饒舌だ。

「……」

「お分かりかと思いますが、あれは四神の力ですよ。東の『青龍』——。唯一、黄龍を制御することのできる力です」

「えっと……？ 董天大人はなぜにそんな力をお持ちなので？」

「自分でもよく分かりません。ある日突然使えるようになりまして」

「は？」

「……」

董天が何を言っているのか、青龍が制御するとはどういうことなのか、さっぱり分からなかったが、沙龍には本能的に分かる部分もあった。

四神の力というのは、それぞれが惹き合い、黄龍もまた、四神の力と惹き合う。

沙龍が、董天を嫌いつつ、完全に離れることができないのも、そのあたりに理由があるのかもしれない。

「四方に配置されるその神の力が揃えば、あなたの召喚技も暴走することはないでしょう。ですから、以前、四神の力を持つ者を見つけたほうがいいかもしれない

い、と進言したんですが、その時は、右から左に流されましてね」

「あ、そう、いや、流してはないよ。こうしてちゃんと覚えてたじゃん」

「ただし、私も探すことについては賛成ですが、相手は名前も性別も歳も分かりませんからね。私のように突然目覚めたり、生まれながらにそういった力を持っていたり、様々でしょう」

「ふーん……」

「現実的には、かなり無謀な話だとは思いますが」

「ふーん……」

その後、歴史の教師よろしく陰陽五行説のウンチクをくどくど説明されたが、それは右から左に流した。

四神探しという口実はできた。

ここでやり残したことはない。

うってつけの後継者も居る。

文句を言ってくる人間が居ても、それを笑顔で黙らせるだけの力もつけた。なら、あとは実行するのみ――。

蒼龍会を出ていくと誓った日から実に八年。
沙龍はやっとそう言えることができたのだ。

「董天、ちよつと日本に行つてくる」

沙龍が何かをしている気配は察していたが、汪はなにも知らされていなかったし、聞くこともなかった。

惰性のように続いている関係は惰性でしかなく、沙龍が自宅のパソコンで一人分の日本行きの飛行機のチケットを予約したのを知る段階になっても、汪は直接訊ねることはしなかった。できなかつたのだ。

そして、上海を発つ前日の昼ごろ、沙龍が一階のカフェでマスターと冗談を言い合っているのを、路肩に停めたメルセデスの中からなんとなく眺めていた。

沙龍は汪に気付いて、いつになく愛想のよい笑顔を見せた。

結果的にはそれが彼女を見た最後になる。

汪がそれを知ったのはその日の夕方だった。何か言いたそうにしている小春を問いただしたら、全てを白状した。

今日、香港に寄ってから、その足で東京に向かう手配を、自分がした、と。

「今日？ 明日じゃないのか」

「明日……？」

小春は、沙龍が自宅のパソコンでチケットを買っていたことを知らなかった。あれは、汪が見ることを想定した上での工作だったのだ。

「すみません……、間に合うように教えてあげられなくて」

小春は泣きそうになっていた。なんでも、見送り不要、他の人間には言うな、と念を押されていたようである。

「いや、いいさ……」

泣きたいのは自分だ、と汪は思った。しかし、そんなことは意地でも認めてはならない。

既に、李沙龍は上海のどこにも居ない。万歳、やっとこれで自由の身だ。喜べ、汪。もう、あの棒切れみたいな体を抱きしめてやらなくていいわけだ！

さて、今日はこれから何をしよう。一気に暇になった気分だ。

そうだ、メイに連絡をしようか。

あの可愛い手をした、健気な美容師を食事に誘って、それで……。

「……」

恋人だったわけでもない。

特別な挨拶をして欲しかったわけじゃない。

別れは覚悟していたさ。

そうだ。

横柄で、色気も、遠慮もないガキだったじゃないか。

まったく、二年半もよく我慢したと思う。すごいよな、俺。

だけど、今ほどサングラスをしていてよかったと思ったことはない。それほどに情けない顔をしていたことだろう。

その時、ふわっと机に置かれたものがある。

「……?」

見慣れたリッツカールトンのカードキーだ。

見上げると、董天が立っていた。

「沙龍様からこのキーを預かってます。私物の整理がてらミスター汪に泊まってもらえ、と」

「……最後の最後までコキ使ってくれるな」

そう言ったが、不思議と気分は浮上した。

忘れられていなかった、と分かって情けなくもホツとしている。

「……？」

董天がなかなか去らないので、無言で「なんだ？」という顔をしてみせた。

「あー、なんでも、沙龍様がもう一人、ホテル側のスタッフにも個人的にその私物整理をお願いしたみたいで……」

「は？」

「つまり、そのスタッフと一緒に泊まり仕事で片付けろってことじゃないですかね。メイさんという人です」

「……」

私物といっても、洗面所に置いてあったシャネルの香水くらいしか思いつかない。

つまりそういうことか、と汪は久しぶりに声に出して笑っていた。

香港のガラス張りのビルのオフィスでは、張が秘書風の美女とイチヤイチャしていた。

「仕事シロ、この絶倫中年」

沙龍はドアを開けるなり、ため息をついた。

風紀うんぬんを言うつもりはないが、こんなオープンなオフィスで、向こうのビルからも丸見えではないか。

「し、失礼しました……！」

秘書は慌ててブラウスの前を閉じて出て行った。

張は、いいところを邪魔されて、少々不満のようである。

「これはこれは、ボス。香港へようこそ。歓迎しますけどね、タイミングってものがあるでしょう。もし本当に最中だったらドースんの」

「本当にヤバイかどうかは、ちゃんとドアに耳あてて確認したわい」

「そりゃ、お手を煩わせまして、どうも……」

沙龍は、高そうな木のデスクに腰かけて、白い封筒を張の前に置いた。

中身は、香港発上海行きのアーストクラスのチケットである。ただし、一枚きり、片道だ。

「お、いいねえ。日本の航空会社は大好きさ」

「他の幹部連中には『張大哥は日本に留学中の老板の代理』と言ってあるけど、私は戻ってくるつもりはないから、体制は好き勝手に変えていいよ」

「そんなツレないことを。二年間だけって話だから引き受けたのに」

「黒猫が失脚してからこっち、だいぶ休んだだろう。蒼龍会が本来の姿に戻るだけだ。いい加減、腹を決めるんだね」

「はいよ……」

相変わらず、どこまでが本気なのか分からない。しかし、心底嫌がっている風でもなかった。張にとつては『老板業』も遊びなのかもしれない。

「日本でなにか面倒なことに巻き込まれたら、キョートに居る俺の友達を訪ねてくれ。俺には一つ借りがあるから、助けてくれるはずだ。シローっていうんだが……。ええと、本名はやたら長いんだよな。ちよつと待ってくれよ……」

そう言つて、張は机の引き出しを開け、中をこそこそと探していた。

目指すものはわりとすぐ見つかった。上等な紙の名刺だ。

「そうそう、これだ。つちみかどしろうまさおみ土御門四郎雅臣」

「なにその面倒くさそうな名前。お貴族様ってやつ？ ナニモンなの？」

「貴族じゃなくて、お公家さんだ。まあ、似たようなもんだがな。腕は間違いない日本最強だから心配すんな」

「分かった。貰っておくよ」

張が何か書き込んで寄越したその名刺をポケットにしまった。

「それで、お前さんの欲しいものは見つかったのか？」

去り際に、張が訊ねた。

沙龍が軽やかに笑う。

「馬鹿だね。これから見つけに行くんじゃないか」

新しい街、東京に――。

